



水辺のあ る暮らし



平成19年度「川に学ぶ」活動事例集

2009.1

財団法人 リバーフロント整備センター
Foundation for Riverfront Improvement and Restoration

<http://www.rfc.or.jp/>

財団法人 リバーフロント整備センターは、水辺空間に関する調査研究および技術開発を総合的に実施し、かつその成果を幅広く社会に活用し安全で豊かなうるおいのある国土の建設に資することを目的に活動しています。

この冊子は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

表紙の写真

都賀行公民館子どもクラブの 皆さん (島根県／猪谷川)	NPO法人 会津の文化づくり の皆さん (福島県／湯川支流)
群馬県邑楽郡邑楽町立中野 東小学校の皆さん (群馬県・栃木県／渡良瀬川)	NPO法人 五ヶ瀬自然学校の 皆さん (宮崎県／五ヶ瀬川)
遠山川探検隊「まめなかうり んぼう」の皆さん (長野県／遠山川)	鶴見川下流ネットワーク・鶴見 の皆さん (神奈川県／鶴見川)

はじめに

平成10年6月、河川審議会「川に学ぶ」小委員会より、「『川に学ぶ』社会をめざして」が提言され、「川に学ぶ」社会の実現を促進するために、さまざまな取り組みが始められました。

財団法人リバーフロント整備センターでは、平成11年度から市民団体等の方々が河川・海岸等の水辺で行う自然体験や環境教育等の活動に対して助成する「川に学ぶ」活動助成事業を行っております。

平成19年度は、全国各地の市民団体・小学校等から、自然体験や環境教育をはじめ、水辺を活かしたまちづくりに資する活動など、185件の応募をいただきました。このうち、36団体の方々が、本事業を活用してさまざまな活動を実施されました。

この冊子は、その活動状況をご紹介させていただくものです。これが、活動を実践されている方々の励みになるとともに、今後の多くの「川に学ぶ」活動の参考になれば幸いです。

なお、本冊子に記載されている河川名等は、各団体から提出のあった活動報告書をもとに記載しているため、地域・地区での呼称もあり、必ずしも管理者が定める名称ではありません。

また、活動目的・活動内容・活動の効果・反省点等についても、活動報告書を概ね原文のまま記載しています。

平成21年1月

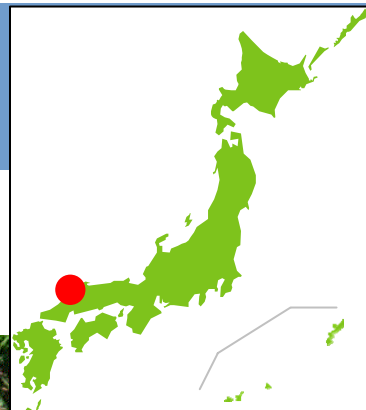
目次

1	都賀行公民館子どもクラブ 島根県 猪谷川	19	ずしし環境会議・まちなみと緑の創造部会 神奈川県 田越川
3	明石高専河川環境研究室 兵庫県 喜瀬川・鹿島川	21	自然と暮らしを考える研究会 佐賀県 厳木川
5	NPO法人長良川環境いづみ協会 岐阜県 長良川	23	NPO法人瀬田川リバプシ隊 滋賀県 瀬田川・琵琶湖畔
7	千代田のアサザ保存会 佐賀県 中地江川	25	川原で遊ぼう会 東京都 平井川
9	すいすい倶楽部 広島県 沼田川	27	忌部わくわくサファリ 島根県 忌部川
11	丹波市立西小学校 兵庫県 葛野川	29	遠山川探検隊「まめなかうりんぼう」 長野県 遠山川
13	NPO法人五ヶ瀬自然学校 宮崎県 五ヶ瀬川	31	芦田川環境マネジメントセンター 広島県 芦田川
15	鈴鹿高等学校自然科学部 三重県 鈴鹿川	33	北陽わんぱくクラブ 島根県 斐伊川・江の川・高津川
17	薩摩川内市立入来中学校 鹿児島県 樋脇川	35	報得川と美海の会 沖縄県 報得川

37	琵琶湖市民大学 滋賀県 余呉湖・琵琶湖	55	NPO法人アサザ基金 茨城県 霞ヶ浦
39	水の自遊人しんすいせんたいアカザ隊 山口県 佐波川	57	青森県立五所川原農林高等学校 青森県 飯詰川
41	長崎県立大学経済学部地域政策学科西村研究室 長崎県 相浦川	59	余笹川流域連携ネットワーク 栃木県 余笹川・黒川・三蔵川
43	NPO法人鶴見川流域ネットワーク 東京都・神奈川県 鶴見川	61	NPO法人会津の文化づくり 福島県 湯川支流
45	鶴見川下流ネットワーク・鶴見（下流ネット・鶴見） 神奈川県 鶴見川	63	茨城県稲敷郡美浦村立美浦中学校科学部 茨城県 霞ヶ浦流入河川他
47	NPO法人みずのとらBELL隊 熊本県 加勢川	65	群馬県邑楽郡邑楽町立中野東小学校 群馬県・栃木県 渡良瀬川
49	NPO法人水辺に遊ぶ会 大分県 中津干潟・山国川	67	宮津美しさ探検隊 京都府 大手川
51	NPO地域生活文化ENN（NPO法人En） 滋賀県 針江大川・カバタ	69	隅田川市民交流実行委員会 東京都 隅田川
53	森のココペリ 山梨県 鶴川・方屋川・飯尾川	71	伯母Q五郎～伯母川研究こどもエコクラブ～ 滋賀県 秋ノ川・伯母川他

都賀行公民館子どもクラブ

島根県／猪谷川



『僕たち・私たちの猪谷川』



川の石の底にいる生き物観察



子ども達が自分で生き物の捕獲方法を考え、なるべく魚たちを傷つけない工夫をしているとの事。次世代によい河川環境が引き継がれそう。とても楽しみ。(T.H)

子どもの川遊びに魚調査を取り入れ、魚捕獲には老人会の知恵や手伝いも得た世代を越えた活動が、今後も盛んになるといいですね。(M.M)



地域の方々の自宅での昼食
昔の川の様子を聞くことができました

■活動の目的

公民館の近くを流れる猪谷川（一級河川・江の川水系）には、どのような魚たちが住んでいるのだろう。この素朴な疑問を公民館合宿や日頃の川遊びをとおして調べてみようということになりました。昭和50年代以降、プールでの水泳が一般的になり、川遊びが一過性の体験活動となってしまいましたが、今年の夏は猪谷川を遊びの場にしようとの呼びかけで、魚調査を同時に行いました。このため、専門的な捕獲の仕掛けではない、自分たちでできる調査を基本にしました。そして、生き物の捕獲は、できるだけ自分たちでできる方法を考えることにしました。

■活動の内容

1. 捕獲方法をクラブ員全員で考えました。
2. 調査では、魚たちを傷つけない。

3. 釣り針を使用した調査は、極力さける。（1回ほどおこないました。）
4. 必要以上の魚（川の生き物）は持ち帰らない。
5. 持ち帰った生き物は、必ず水槽で半年をとおして観察する。

以上の約束を決めました。生き物の捕獲方法は、ペットボトルで自作することになりました。そのため、ボトルの入口以上の大きさの生き物は捕獲できませんでした。そのかわり、1回だけ釣り針による魚釣りをおこない、「ギギ、ナマズ」をつり上げました。その時には、以前には絶対いなかった「ブルーギルとブラックバス」がかり、その生態を学習しました。

また、6月の猪谷川流域のホテル調査では、今まで気づかなかった「ヒメぼたる」の群生地を発見しました。



公民館で一生懸命の観察です



流域の林で「カブトムシ」や「クワガタ」の観察



都賀公民館水族館のヨシノボリ類とタナゴ類



看板を4枚作り、猪谷川の流域と地域の歩道沿いに設置しました

■活動の効果

こども達だけの活動ということで始めた調査でしたが、自分たちの自作の捕獲器では観察のできない生き物がいました。そのため、地域の川の大先輩である老人会（都賀行明老会）の人たちに手伝ってもらい「アユカケ」を捕まえ調査することができました。

夏休みを利用した公民館合宿時の調査では、地域の民家を拠点（基地）として、2日がかりの調査ができました。

そして、捕獲した生き物は同種について2～3匹を限度に公民館の水槽に持ち帰り、生きたまま、冬を越すためにはどのような飼い方が良いのかをみんなで話し合いました。水槽は「都賀行公民館水族館」と名付けて10個を設置しました。その水槽の見学に、都賀行公民館エリア外の小学校（邑智小学校）の児童や保育園（都賀保育園）の園児が訪れることができました。そのときは、クラブ員がチビッコ講師として、魚の名前や好物の餌、住みよい水槽とは、の質問に答えることができませんでした。今でも見学者は絶えません。

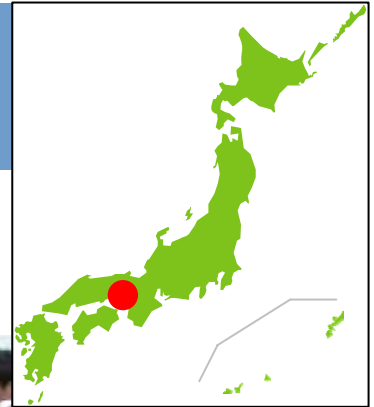
■苦勞した点・反省点

持ち帰った生き物をできるだけ、猪谷川の環境に近づける学習をしました。そのため、水族館というものの鑑賞には適さない水槽が半数を占めました。そのわけは、川底の環境をつくるために捕獲した場所の石と水、水草を水槽に入れることにこだわったからです。



明石高専河川環境研究室

兵庫県／喜瀬川・鹿島川



身近な河川における小中学生のための環境講座



中学生のための環境講座



地域の住民や中学生と河川清掃

■活動の目的

東播磨の中央部を流域とする典型的な都市河川であって、近年、洪水災害の防止と自然環境の保全を目指した多自然川づくりが進められている喜瀬川や鹿島川を対象とし、水質調査や生物調査、河川清掃等の実体験学習を通して、地域の小・中学生の環境に対する関心を高めるとともに、地域住民を中心とした安全で良好な自然環境を有する河川の保全と創出を図ることを目的とする。

■活動の内容

屋外での公開体験講座として、地域の小・中学生を対象に、喜瀬川流域の歴史と文化について学習するとともに、現地での水質調査・生物調査を通して河川環境の現状とその保全・再生の重要性について考える。また、地域住民と連携して広範囲の河川清掃を行い、親水性や環境

美化への意識の向上と”安全で快適な地域の川づくり”を目指す。具体的な活動は、以下の通りである。

- ・ 周辺地域住民と連携した河川清掃
（第1回：平成19年6月10日、第2回：平成19年9月8日、第3回：平成19年12月10日
第4回：平成20年3月（予定））
- ・ 小中学生を対象とした公開体験講座
中学生のための環境講座（平成19年9月8日）親子で楽しむ水質試験体験講座（平成19年11月18日）



親子で楽しむ水質試験体験講座
～透視度計の作成方法を説明している様子～



水質調査（透視度）の様子



清掃後の集合写真

■活動の効果

河川清掃及については、河川管理者や地域住民の協力のもとに行い、地域における河川環境保全活動の普及に役立った。

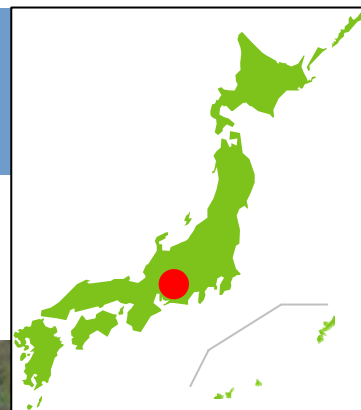
水質調査や生物調査を通して、川の知識、川の接し方や遊び方などの学習を行い、安全で良好な自然環境を有する河川を保全し、創出することの重要性を理解してもらうことで、地域の小・中学生の環境に対する関心を高めるができた。

■苦労した点・反省点

環境講座の募集人数（20名）に対して応募者が多く、スタッフの人数との関係から参加者を抽選せざるを得なかった。

NPO法人長良川環境レンジャー協会

岐阜県／長良川



ながらっ子レンジャー自然体験活動



子供たちが自分の力で川の流りに合わせ危険箇所をチェックしながら下ってきた



水生物調査で採集してきた川虫を分類しているところ

■活動の目的

環境学習の中で自然体験活動は、“人と環境の関係について理解を深め子供たちが責任ある行動をとれるようになる”格好の場である。川から離れてしまっている子供たちが身近な川で学び行動することにより、川を知り川への関心を高めてくれる。また自分達の暮らしと川との結びつき・川の水の汚濁の仕組み・自分達は何が出来るかなどを水辺から学ぶことによって地域への愛着心が芽生え環境への意識も自然と高まっていく。そのような河川を活かしたまちづくりの活動を川に学ぶ体験活動の指導者・ノウハウ等を活用し、川に学ぶ社会の実現を促進していく。

■活動の内容

- ①川で安全に楽しむ為にはと題し水辺での安全対策として、スローロープによる救助方法・ライフジャケットの正しい装着法を学び、Eボートによる川下り体験をする。
- ②水生生物を採集してすんでいる川虫によって水質を知る。また、その川虫をえさに手作り竿で魚釣り体験をする。
- ③上流の子供たちとの交流では、郡上八幡の美山鍾乳洞にて洞窟探検を通して触れ合う。
- ④まとめとして、長良川にすんでいる動物探検（動物のフンと足跡さがし）



スローロープによる救助法を学習した



採集した川虫を餌にして手作りの竿で魚釣り



上流の子供たち郡上のメタッコレンジャーと交流だ！



見つけた動物の足跡を石膏取りをした

■活動の効果

- ・Eボートによる川下り体験では、川で活動することの楽しさとそこに潜む危険性を学んだ。川でおぼれたらどうするか！ライフジャケットの正しい装着法とスローロープによる救助法も学んだ。危険箇所のチェックと川の流れや水量など実際に体験することで、自然の素晴らしさと人と川との関わりを学習した。
- ・水生生物による水質調査を通して、川を汚さないためにはどうすればいいのか？子供たちの環境保全・美化に対する興味が高まった。
- ・上流の子供達との交流では、自分達が住んでいる地域との違い（文化歴史・生活習慣）を知ると共に人と人とのふれあいを通じてコミュニケーション能力が身に付いた。

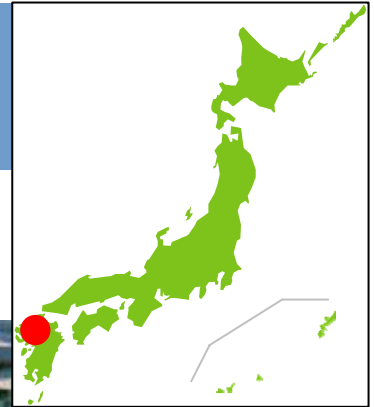
■苦勞した点・反省点

- ・十分な参加募集（幅広い広報活動）が出来なかったため、参加者が予定人数よりも少なかったことと、内容をもう少し詳しく紹介するべきだった。
- ・Eボート川下り体験では、安全対策を十分配慮し、スタッフも各箇所に配置したが、やはり人数ではなくスキルを持った人をもう少し配置し、ゆとりを持って活動にあたりたい。



千代田のアサザ保存会

佐賀県／中地江川



アサザ観察会



下流域のアサザ分布地



アサザの説明



小中学生の参加や保護者の体験活動が幅広く行われ、また、市、ボランティア団体等の多様な関係者が協力しており、活動の広がりと今後の発展が期待できる。(F.Y)

■活動の目的

中地江川は近年、河川改修が行なわれており、アサザ分布地域が減少しつつある。アサザ保存会は千代田の河川に生息しているアサザや水辺の植物の生育環境保全を図り、貴重な植物を守っていくとともに、地域の子供の環境学習として活用し、地域住民の環境意識向上、アサザを基調とした水辺とまちづくりへの参画等、川を活かした地域づくりに資する事を目的としている。

今回は、地域の子どもたちが水に親しみ、地域の水辺の生物に興味を持つように、ボートを利用した行事とした。

■活動の内容

- ・ 7月8日－河川堤防を主とした陸域部の植生調査と美化活動
 - ①井上先生による環境と現地植物の話
 - ②ゴミ収集
- ・ 8月28日－河川水域における親水体験、アサザの観察、漂流物調査と収集
 - ①井上英幸氏の環境とアサザについての講話
 - ②ボートやカヌーののり方の指導（城原川エンジョイクラブの協力）
 - ③水辺の活動の心得・注意
 - ④水域（ボート等）におけるアサザや水辺の植物等の観察と漂流物調査・収集
 - ⑤水泳体験
 - ⑥資料整理
 - ⑦感想を語る会



小中学校イベント体験の皆さん



井上先生の指導・講評



保護者も漂流物収集に協力

■活動の効果

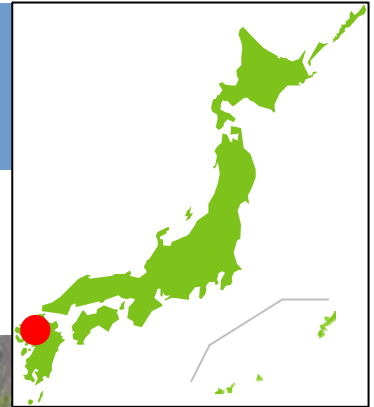
小中学生の参加者は、水辺の安全な親水体験や植生調査など、楽しく真剣に参加し、河川的环境学習として成果が得られた。保護者の体験もあり親子の共通認識が得られた。8月28日はウィークデイにもかかわらずボランティア団体の積極的協力が得られた。神崎市においては各課が横断的に実行委員として参画し地元民との協働を計った。地域の町内会及び自治公民館が全面的にバックアップし、子供クラブを中心に小学校区を巻き込んだ行事となり、地域環境、河川環境について学んだ。

■苦勞した点・反省点

主に小学校高学年・中学生を対象としたが学校の行事が多く実施日の設定に苦慮。カヤックの1人乗りは身体的制限をつけ5年生以上としたため、一部で不満。ウィークデイのため大人の参加協力が苦慮した。アサザ観察目的を主としたが、例年に比べ花が遅れ、点在している程度で、むしろカヤック・カヌー体験、ゴミ拾いが中心となった。実施時期の検討は課題。（本年は10月上旬以降に多くの開花があった）

すいすい倶楽部

広島県／沼田川



水環境啓発活動（沼田川の水生生物に親しむ）



親子で川遊び



みんな笑顔いっぱいでもう来たいと言っていた



子どもが初めて川に入り水生生物に触れ、川の世界を体験するにも親子だと安心。親子での川遊びが盛んになるといいですね。（M.M）

■活動の目的

1. 親子で川に入り淡水魚や水生生物と一緒に捕獲することで川への親しみを増進させる。
2. 沼田川の淡水魚や水生生物を毎年展示することで環境の変化を実感してもらい沼田川の環境を考える啓発活動とする。



■活動の内容

1. 川がき、川おやじを公募し沼田川の生物に親子でふれあってもらおう。総合学習に協力し児童とともに沼田川で水生生物を採取し実物に触れ環境学習をする。
2. 採取した水生生物をアクアフェスタin福富及び東広島生涯学習フェスティバルで毎年展示し水生生物と触れ合ってもらおう。また絶滅危惧種などの採取状況を説明することで、水環境の大切さを考えるきっかけとなればよいと考える。（アンケート調査を行いデータとして残す）



川で水生生物や淡水魚捕獲後生態の勉強をしました



魚とり



2日間で来館者は650人に及んだ。アンケートでは「懐かしい」「種類が多い」などの感想が多かった

■活動の効果

1. 総合学習では初めて川に入った児童も多く楽しんで体験させられた。あらかじめすいすい倶楽部で採取した淡水魚を展示し、特徴や生態系を説明すると熱心に聴いていた。興味を持ってくれたと思う。
2. 総合学習では種類の多さにビックリした、懐かしい、楽しかったなどの意見が多くアンケートも多くの人が協力してくれて、川に親しむ楽しさをアピールできた。

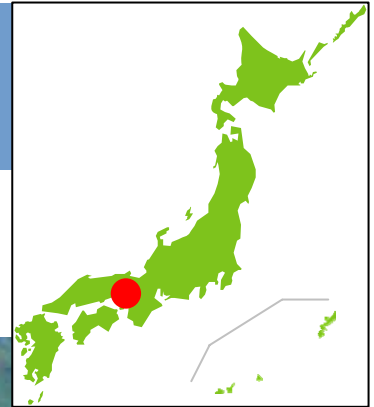
■苦勞した点・反省点

親子で参加の川体験は急に気温が低くなったため（9月末）子どもの参加を見合わせる人が多数出た。アンケートは主に〇×式にすれば回答率ももっとよくなったと思う。展示するだけでなく魚にじかに触られるコーナーも作ればもっと興味がわいたと思う。

丹波市立西小学校

兵庫県／葛野川

6年総合学習「川の汚れを探ってみよう」



採取した生物の分類
生物指標とどのように対応するのか講義



パックテストで水質を判定する児童

■活動の目的

パックテスト（COD）や指標生物の個体数調査を昨年度に続き継続実施し、どのくらい川が汚れているのかを調査し、川マップに整理する。

また、調査結果だけではなく、川の周りの様子を観察しながら、川の汚れ方にどのような特徴があるのか考察し、きれいな川に戻すために自分たちができることを考える。

活動の様子をホームページにまとめ、他学年や保護者に河川の環境を守る大切さを伝える。

■活動の内容

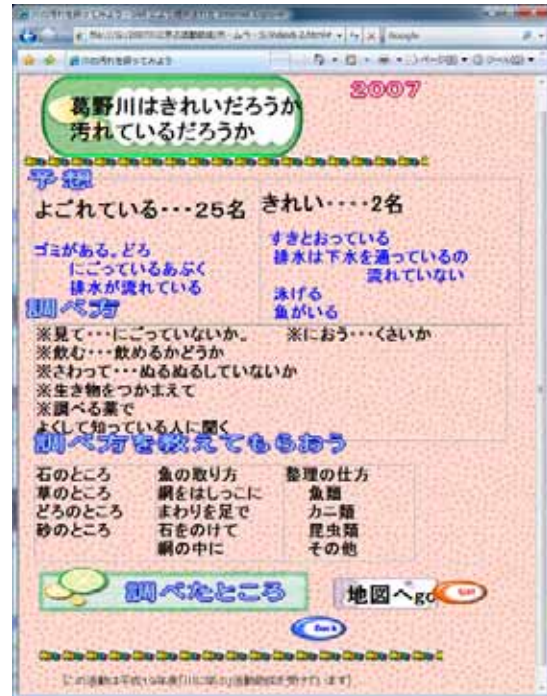
調査地点を上流1ヶ所、中流2ヶ所、下流1ヶ所とぎめ、様子を観察した。パックテスト（COD）や指標生物の個体数を調べ、水質を判定した。そのときには、専門家に来ていただき、調査方法を指導していただいた。その結果を川マップにまとめ、調査地点ごと（上・中・下）の汚れ方を考察し、川の環境を守るために自分たちができることを考えた。また、調査結果を模造紙でまとめ、参観日に掲示物として公開し、保護者に啓発を行った。



水生生物の捕獲と分類について教えていただく



捕獲した生物じっくり観察する児童



ホームページに活動の様子を報告

■活動の効果

指標生物調査を地域の専門家2名に指導していただき、捕獲法や分類法をわかりやすく教えてもらうことができた。これは担任だけでは指導できないので非常に効果的である。

川の環境調査を通じて、学校と地域のつながりを深めることができた。地域の人や保護者、下級生にホームページを通じて、西小校区の河川環境について調べたことを発信することができた。環境保全活動を通じて地域の環境を守ろうとする意欲を育てることができた。

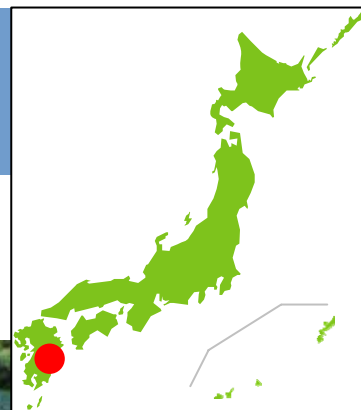
■苦労した点・反省点

助成2年目の活動ということで、スムーズに進んだ。本校の総合的な学習の時間のカリキュラムにも川の汚れを探る活動がしっかりと位置付けられた。今年度は、担任が学級通信やホームページで細かに調査結果を情報発信することができた。校内の担当者が代わっても、継続して活動ができるようにしていきたい。

NPO法人五ヶ瀬自然学校

宮崎県／五ヶ瀬川

環境学習五ヶ瀬川蘇陽峡中山ダムカヌー教室



風に流されないよう、隣のカヤックにつかまりながらの集合



数年前、実際に土砂崩れが起きた現場。そうなってしまった理由をきいているところ。



理屈抜きで、何しろ川と楽しい付き合いが出来ている。大いに遊び、川の素晴らしさを実感し、今後も郷土を愛し、河川愛護精神を培ってほしい。(T.H)

■活動の目的

五ヶ瀬川の上流域に暮らす子ども達に、身近にある川を利用して、専門的知識を持った指導者の下、遊び・学ぶことで、川の大切さ・素晴らしさを再発見し、郷土を愛する心・郷土の美しい川を誇りに思う心を育てる。

■活動の内容

- 川の安全対策（レスキュー3ジャパンに準じる川での安全指導）
- カヌー体験・カヌーツーリング（水のカ・川の形・流れ方を遊びながら学ぶ）
- 河原や水中の生物観察（良好な水質に住む生物について学ぶ）
- リバートレッキング（水のカ・川の形・流れ方を遊びながら学ぶ）
- 教室での事前学習、感想文



カヌーに乗る前は、入念に準備体操を行う。



ほとんどの生徒がカヌー経験者。
漕行は慣れたもんです。



壮大な自然に囲まれての環境学習



今日の環境学習、楽しかった人は？

■活動の効果

昨年および一昨年に小学校の総合学習の時間で川の安全対策とカヌー教室を経験した子どもたちが、今回は中学校の総合学習の時間で、本格的なカヌーを使ったエコツーリングを経験することができた。台風による土砂崩れ現場、間伐されていない植林地、原生林、ダム湖、ダムの堰などをカヌーに乗って実際に見ながら、山、川、海の水循環について、ダム湖と水力発電についてなど専門講師による環境教育を行った。

五ヶ瀬川源流部に住む子どもたちが、川や海を守るためには山を整備しなければならないことが理解できたようだ。今後の山づくり、川づくり、街づくりに役立つ人材育成にわずかではあるが貢献できたのではないかなと思う。

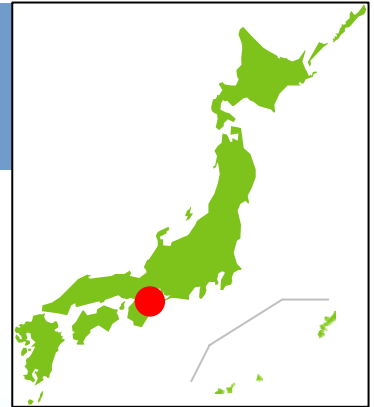
■苦勞した点・反省点

使用する中山ダムへ行く道が非常に狭いため、カヌーの準備および当日の参加者の輸送などに苦勞した。来年度はできれば1回の人数を20名程度になるよう回数を増やすなどして調整したいと思う。



鈴鹿高等学校自然科学部

三重県／鈴鹿川



鈴鹿川水系の現状と課題～鈴鹿川水系の環境調査V～



OBを入れた調査風景



ショッピングセンターでのプレゼン

■活動の目的

1. 鈴鹿川の現状を詳しく調べる。
2. 高校生としてできることを探し、地域で啓発活動をする。
3. 環境保全活動を推進する次世代のリーダーを育成する（部員）。



■活動の内容

- 鈴鹿川水系35地点での、年4回の化学的手法（9項目）による水質調査。
- 本川13地点での水生生物による水質判定、および魚類と水生生物の分布調査。
- 鈴鹿川水系における天然記念物ネコギギのモニタリング（4泊5日の夜間調査）。
- 地域でのボランティアのサポート（小学生の魚とり体験など）
- ショッピングセンターで買い物客に対するポスター発表による啓発活動。
- 各種大会で発表・データの使用



夏の鈴鹿川体験サポートボランティア



水のいのちとものづくりの国際シンポジウムでの発表



夜間水深風景



水質測定のための採水の様子。
35地点あるうちの34番の地点。

■活動の効果

生徒たちにとっては、鈴鹿川水系35地点での採水と理科室での測定を通して、科学的かつ客観的に河川環境を知ることができ、また、調べた結果を地域にプレゼンテーションし、地域の方々から色々な意見をもらうことで、自分達の行なう活動の重要性を学ぶことができた。

ショッピングセンターでは多くの買い物客が、私たちのブースで足を止めてくれて、また専門的な方々も多数訪れていただきました。また、「水のいのちとものづくりの国際シンポジウム」(12月1日)では三重県代表として発表し、アンケート結果では「最も興味深かった内容」という評価を得た。「川のワークショップみえ」(2月17日)での発表もひかえており、まだこれからも啓発活動を実施する。

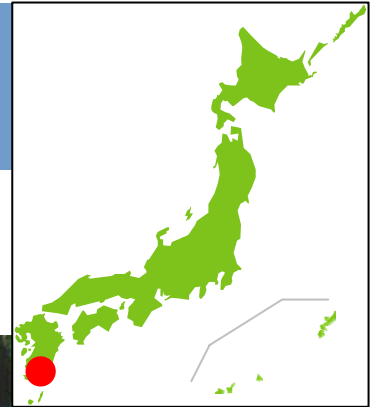
■苦勞した点・反省点

今年は部員数が多く、環境調査活動の必要性や意義が浸透するか不安でした。生徒一人ひとりに語りかけることで、意識レベルは上がったように思います。



薩摩川内市立入来中学校

鹿児島県／樋脇川



樋脇川の環境調査と地域・水族館との連携



石の裏にいた生物はどれだろう



水族館の方の授業

■活動の目的

町の中央を横切り、学校の脇を流れる身近な樋脇川の水質・生物調査を行うことで、観察の方法や視点、器具や薬品の使い方のスキルを身につけさせると共に自然に親しみ、愛おしむ心を養いたい。そして、実際に観察や生物を捕獲することで関心を高め、水槽や池で飼育することも合わせてその生態を詳しく知る手がかりとしたい。また、清掃活動を兼ねたゴミ調査を行うことにより、現状を知ると共に環境を大切にする心を地域や他の生徒や地域の方々にも同様な意識付けをしていきたい。

調査したことは各種団体に送るとともに、壁新聞にまとめてコンクール等にも出品し評価していただくことで客観的な思考も育成できるように図りたい。また「鹿児島環境大臣」へも作文で応募した。

また水族館(福岡マリワカ)と携帯電話FOMA(以下FOMA)を使って遠隔授業を行い、専門の学芸員に授業をして頂くことにより、興味関心を高めるだけでなく知識・技能を深めより専門的な活動を行うことで、環境を守るためのエキスパートとして他の生徒だけでなく地域全体を担う役割を果たせるようにしたい。

■活動の内容

下記の事について、定期的に継続して調査を行った。

- ①樋脇川の状態→幅、深さ、流れの速さ、川底の状態など
- ②水質→透明度、におい、温度、PH、ORP、電導率、COD、NO₂、リン酸
- ③生物→種類、数、場所など
- ④飼育→捕獲した生物を水槽や池で飼育、観察
- ⑤ゴミ→数や量、種類、地域の清掃活動への参加など
- ⑥清掃活動→④で調査し記録をとったものを集め分別処理
- ⑦地域との活動→地域で行われる川を中心とする行事、活動への参加、援助
- ⑧報告、応募→・県の委託の水生生物による水質調査・環境(壁)新聞コンテスト、子供エコクラブへの壁新聞提出・文化祭での発表や調査結果の掲示
- ⑨鹿児島環境こども大臣→環境に関する作文を全員書き、応募
- ⑩水族館との学習→FOMAを使いマリワカと遠隔授業を行う。そして実際に学校にも来て、選択理科の授業と講演もしていただく。



水質調査：薬品の使い方も学ぶ



調査・研究したことを文化祭で発表した



壁新聞の完成！

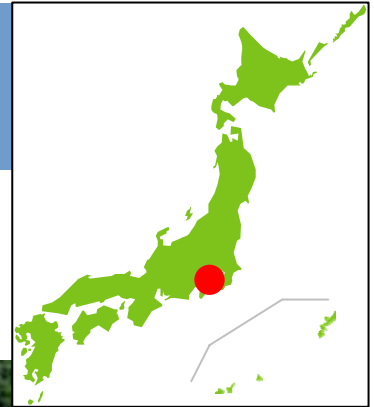
■活動の効果

- 自然の変化を調べるため、事前調査として、お年寄りなどに昔の川の様子、生物の捕獲の方法などをインタビューによる交流ができた。
- 「環境こども大臣」へ応募することで意識が高まった。
- 川を中心とした清掃活動により環境への意識が高まった。
- 調査・研究したことを文化祭や壁新聞の作成と掲示による研究の報告することにより、他の生徒の環境への意識も高まった。
- 市・県の環境関係・河川局やエコクラブなどの環境団体へ活動・調査報告ができた。
- 調査の方法や器具、薬品の使い方、飼育などのスキルが高まった。
- 遠隔授業により学習に対する生徒の意識が高まると共に専門的な知識を高められた。また学校に来ていただくことで全校生徒にも広げることができた。

■苦勞した点・反省点

- 25名の生徒に対して指導者が少なく、十分な対応ができないこともあった。
- 普通は選択理科の授業で活動したが、準備や後始末、行き帰りの時間の関係もあり1時間の授業の中では観察・調査の時間が限られたり、十分なまとめや考察ができないことが多かった。
- 上・下流域のもっと広い範囲や近隣の他の川での調査・観察も行い、その結果を比較する活動も行いたかった。
- 諸コンクールや応募に参加したが作品の完成度が低く入選できなかった。
- 遠隔授業は生徒の学習に関してはとても有効なので、これをより多くの機会をもつとともに、いろいろな種類の講師の方と交流ができるように図りたい。

ずしし環境会議・まちなみと緑の創造部会 神奈川県／田越川



田越川観察会の実施とハンドブックの作成



田越川アドベンチャー



田越川観察会



調査と観察会を兼ね揃えた「コイの数を数えてみよう」は、多様な生き物が暮らす川づくりに向けて、今後の市民へのアピールや、実践的な取り組みにつながる活動として、その成果の積み重ねに大いに期待が持てます。(D.Y)

■活動の目的

- 昨年行った田越川水系の魚類相調査結果をもとに、様々なタイプの観察会を実施し、逗子市民の田越川への関心を高める。
- 田越川が市民に親しまれる場となるための施設整備と環境保全の方策を提案する。



■活動の内容

- 1) 07年4月7日「コイの数を数えてみよう」、
- 2) 07年6月9日「田越川アドベンチャー」、
- 3) 07年8月26日「田越川観察会」を実施。
 - 1) 1970年代に放流されたコイはもともと田越川にくらす生物の生息に悪影響があるのではないかという思いから、「コイの数を数える」ことをはじめた。
 - 2) 子どもの遊び場として田越川を体験するため、田越川を歩いて遡上するプログラムを実施。
 - 3) 身近な自然に多様な生き物がくらすことを実感するため、特に様々な生き物が観察できる河口部で観察会を実施。

これらを企画した経験から、観察会に適していると考えられる場所の柵に、川へ下りるための扉の設置を横須賀土木事務所へ要請し、実施されることが決まった。



コイの数数を教えてみよう

田越川さかな調査 コイの数数を調べよう!



なぜ？田越川のコイを数えるの？

- 田越川は昔はコイのいない川でした。
→「野生化しているコイは確認できなくなった」1973年の魚種調査結果より
→「1976年5月に500尾のコイが放流され、その後半年間に増殖された」
→「1979年10月に500尾のコイが放流され、その後半年間に増殖された」
→「1981年10月に500尾のコイが放流され、その後半年間に増殖された」
→「1984年10月に500尾のコイが放流され、その後半年間に増殖された」
- 過剰な数のコイは水生昆虫や魚類、水質に影響を与えます。
→「コイの存在がトンボ幼虫の生存率を低下させる」
→「コイの存在が水生昆虫の生存率を低下させる」
- コイが田越川にどのような影響を与えているか？を知るために、まず、その動向（個体数の変化）をしらべています。



田越川ハンドブック

2004～2007年の結果

場所	2004年		2005年		2006年		2007年	
	11月21日	11月22日	11月21日	11月22日	4月17日	4月18日	4月17日	4月18日
行基通二丁目橋	10	11	10	11	10	11	10	11
三浦橋	10	11	10	11	10	11	10	11
橋本橋	10	11	10	11	10	11	10	11
葛子川清流点	10	11	10	11	10	11	10	11
葛子川橋	10	11	10	11	10	11	10	11
葛子川上流	10	11	10	11	10	11	10	11
葛子川下流	10	11	10	11	10	11	10	11
葛子川河口	10	11	10	11	10	11	10	11
合計	90	99	90	99	90	99	90	99

田越川のコイは急速に増えているわけでは無いようです。しかし、さかんに放流が行われてから、30年近くが経過し、既に飽和状態になっているのかもしれない。また、コイに餌を与えることにより、過剰な数のコイが生息している可能性も考えられます。今後も田越川の現状を調べながら、田越川のあるべき姿を探していきたいと思えます。『コイの数数を調べよう!』にぜひご参加下さい!!

環境月間パネル

■活動の効果

H18年度から定期的な観察会を実施しているが、今年度はすべての企画で定員一杯の応募があり、参加者のリピーターが増えている。地元のケーブルテレビやFMラジオで紹介されるなど、少しずつ注目も集めるようになり、活動報告の機会（横須賀市自然・人文博物館フォーラム「三浦半島の河川の自然」：H19/11/4、市民環境活動報告会：H20/2/17）を頂くことも増えた。

定期的な観察会等の企画を継続することで、多くの市民と田越川の環境保全を続けていきたい。

■苦労した点・反省点

催しへの参加者が増加し、運営側の準備、安全対策の向上と徹底が必要となっている。

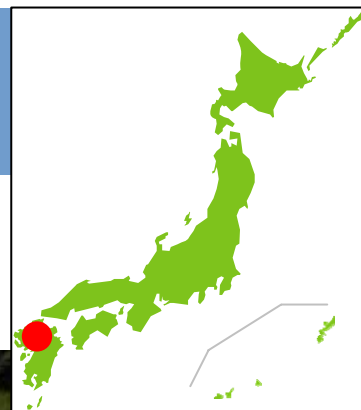
「観察会運営マニュアル」を作成し、安全で楽しい企画を継続することを、来年度に向けた課題として位置づけている。



自然と暮らしを考える研究会

佐賀県／巖木川

巖木川における水環境と暮らしに学ぶ環境学習



今年は巖木川と松浦川の合流地点付近で「夏休みリバースクール」を開催。〈魚のつかみ取り〉



田頭小学校4年生「川の探検隊」の出発式。
さあ何を見つめるか楽しみだあ...。
学習支援者3名も同行し子供たちの安全を図る。



調査結果等の地域への還元を行っており、また、防災に関する活動もあり幅広い視点で取り組んでいる点が評価できる。(F.Y)

■活動の目的

水車が回る用水路と横を流れる巖木川の水辺をフィールドとして、小中学校の「環境学習」ができる環境を整備（草刈・危険物の除去）し、5月から「総合的な学習」を活用して水の多様性について学ぶ学習支援を行う。また前期高齢者（シニア）の社会参加・再挑戦（居場所づくり・人材育成）の仕組みづくりも兼ねた「川の安全教室」等を実践し、身近な自然環境の体験を通して、循環型社会の実現を目指す。

■活動の内容

- 5月・7月・12月：河川周辺（フィールド）の安全対策と草刈などを中心とした環境整備を実施。
- 5月～10月：出前講座と川の探検→観察や体験（課題を自ら探す）→班分け（ゴミ調査班／防災）（災害調査班／水質調査班）→調査・体験活動→（振り返りを繰り返す）→まとめ（学校で発表）。
- 11月22日：公の施設において「学習の成果」を地域社会に向けて発表会（プレゼン）を開き、傍聴者のアドバイスを学校に持ち帰り、3学期には再構築した学習内容をパンフレットにまとめ「校区」皆さんに配布（3学期）する。



川岸のゴミや浮遊物などをゴムボートに乗って回収の様子



「探検隊」一行は、途中ゴミや河床に残る不思議な形「甌穴」などを発見



「出前講座」田頭小学校区の水環境と暮らしの概要について話をした。



防災班は、昨年発生した災害を振り返り、学習した内容をグラフにしたりして「非常食を日頃より準備する」などを地域に向けて発信した。

■活動の効果

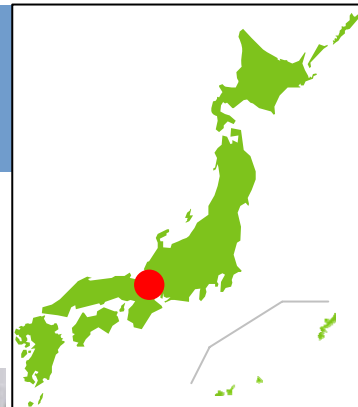
毎年田植を前にした5月の半ばの早朝に地域住民の環境美化活動行い、続いて子どもたちも参加し「水車の取付研修・交流会」を実施した。子供たちの「学習課題」によっては、地域の人が出前講座。夏休みリバーズスクールでは、指導・監視員として団塊の世代（シニアリーダー）の参画を呼びかけ実施した。学習の成果発表を公の施設において、その課題と夢を地域社会に広く発信した。このように年間を通した学習支援と地域の田園風景の保全と文化の伝承が評価され「農水省主催美の里づくりコンクールで「審査会・特別賞」のほか環境保全にかかわる表彰を3件受賞した。

■苦労した点・反省点

平成18年9月の集中豪雨により「小学校」の裏山の崩落によって、土石流が発生した折、「小学校」の運動場に土砂が流れ込んだ。一年後の今年、4年生はその災害現場の復旧の様子を学習したが、家屋被害にあった上級生の人たちのことを思うと、生徒たちの心境は複雑だったようだ。しかし「防災について」の調査班は「災害に備える」機器や非常食備品などについてしっかりまとめた「発表」が印象的だった。

NPO法人 瀬田川リハブレ隊

滋賀県／瀬田川・琵琶湖畔



子供達と生態系の保全、自然環境の保全活動



豊かな湖づくりキャンペーン
外来魚釣り大会370名の参加者



子供達も懸命にヨシ刈り及び、清掃、ゴミ拾いに参加

■活動の目的

琵琶湖・瀬田川の歴史を学び、観察する事により、琵琶湖・瀬田川の果たす役割を知り、川に遊び、親しみ、川の環境保全のため、子供達とともに、外来魚駆除の為魚釣り大会及び外来魚の生態観察を行う。本年は「第27回全国豊かな海づくり大会」開催により、キャンペーン行事の一環として、外来魚駆除釣り大会を開催。琵琶湖の環境保全の為（水質浄化作用、在来魚生息環境）ヨシ刈りを行い、受け継いできた景観を守り、生態系を崩さない活動の輪を広げる。

■活動の内容

琵琶湖・瀬田川の自然環境の保全と改善を次世代に引き継ぐ為、歴史的遺産の学習、生態系改善及び生態系の保全の為、外来魚釣り大会を行い、外来魚の食性観察の為、外来魚生体観察（解剖教室）を滋賀県立大学環境学科院生の講師により実施、5月、10月に実施しました。又9月に外来魚生体観察ワークショップをおこないました。瀬田川河川敷のヨシの育成を助け、景観保全の為、ヨシ刈りを1月に行い、ヨシについて学習会及びヨシ笛奏者のコンサートを行い、子供達にヨシの水浄化作用及びヨシの有効活用等の理解及びヨシ笛演奏会で楽しく過ごした。



解剖指導の先生より魚解剖方法の実技説明



外来魚ワーク：講師の先生より魚の生体について説明



ヨシ刈りの跡、ヨシについて先生より説明を聞く子供達



ヨシ笛演奏者によるヨシ笛コンサート

■活動の効果

第27回全国豊かな海づくり大会が天津市で開催された事があり、湖や川への関心が高まったこともあり外来魚駆除釣り大会には多くの地域住民の参加があり盛り上がった。子供達には外来魚の生体観察を行い、外来魚の食性等の学習が出来た。ヨシ刈りは地域のボーイスカウト、ガールスカウトの子供達や日頃瀬田川を練習の場としている、社会人、大学、高校のボート部の人達とヨシ刈りを行い、ヨシ笛コンサートや環境学習を共に行い大きなネットワークが出来た。

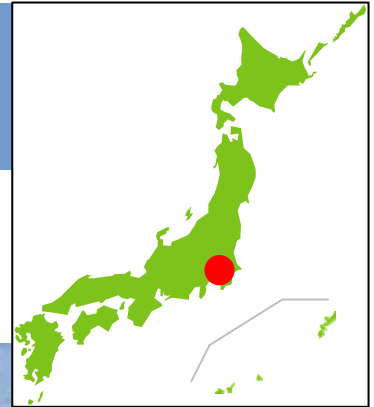
■苦勞した点・反省点

苦勞した点：外来魚釣り大会などは、参加人数が多くなると準備等でスタッフの事前準備が必要。子供達は魚に触る事がほとんど無い為、餌付け等で世話が必要。ヨシ刈りは水辺での作業と刃物を使う為、子供達の安全対策に苦勞した。反省点等：地域企業、自治会への参加を呼びかけたいと思っていたが連携のパイプが作れなかった。今後の課題である。



川原で遊ぼう会

東京都／平井川



市民による生物調査から保全対策を考える



親子参加の自然観察会でトンボの羽化殻調査を実施しました。川の中を歩きながら草や石についた羽化殻を採集しているところ。



採集した羽化殻を講師の先生に教えてもらいながら分類し、種類毎にカウントしました。東京の希少種4種を含む5種488個の羽化殻が確認された。

■活動の目的

里の川・平井川には東京都のRD種に指定された魚類、昆虫類、哺乳類が数多く生息しています。当会では、2003年から「市民による平井川流域自然環境調査」を実施し、希少種の生息分布状態の一端を明らかにしてきました。本活動では、カヤネズミ、トンボ、植生についての自然環境調査を継続する共に、各分野の専門家を招聘し、調査結果を基にした保全対策を検討することによって、今後の川づくりのあり方を提案しました。

■活動の内容

- カヤネズミ調査：平井川で生息が確認されている中・下流域のカヤ原において、使い終わった巣を確認し、営巣状況を調べた。
- トンボ調査：羽化シーズンである4～7月に、上・中・下流域で羽化殻を採集し平井川におけるトンボの分布を調べた。
- 植生調査：カヤネズミの生息域を中心に、カヤ原の分布域とクズ・アレチウリ等の蔓植物の侵入状況を調べた。
- 勉強会の開催：各分野の専門家を招聘し、行政と市民が参加して現地視察を伴う勉強会を開催した。
- 保全対策の提案：勉強会の結果をもとに、19年度河川工事における保全方法を提案した。



「カヤネズミ勉強会」河川工事に関わる行政職員も出席し、熱心な質疑応答がされました



羽化殻調査で採集された羽化殻の一つ。
コシボソヤンマの羽化殻。



カヤネズミの栄養調査をおこなっているときに偶然観察された妊娠中の個体。



表土の掘削後、講師のアドバイスに従い、表土中にあるオギの根茎を手作業で抜き、穴を掘って保管した。
(3月に手作業で委嘱する予定)

■活動の効果

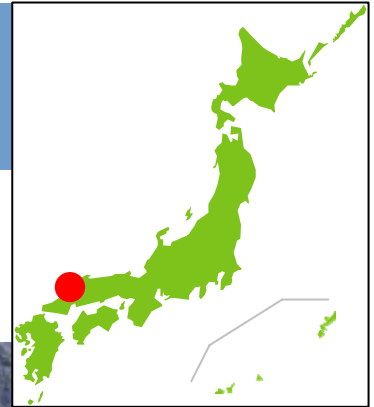
- トンボの羽化殻調査では、自然観察会に参加した親子にも羽化殻の採集を体験してもらい、平井川がトンボの豊かな川であることを実感してもらった。
- カヤネズミについては2003年からの調査の蓄積により、平井川における分布状態や栄養に使われる植物の特徴、栄養環境との関係などが明らかになってきた。
- 平井川のカヤ原を保全するために、行政・地域住民・市民団体がどのように協力していったらよいかについて提案することができた。
- 平成19年度平井川河川改修工事に対し、カヤネズミ、トンボ、植生について具体的な保全対策を提案し、工事に反映させることができた。また、行政と市民が協働で保全作業をおこなうことができた。

■苦労した点・反省点

- 地元住民による河川の草刈とカヤ原の保全については提案にとどまり、具体的な時期や方法の調製については今後の課題となっている。
- 工事に対する保全対策は、いわば試行的な段階で十分なものとはいえず、今後のモニタリングが重要な課題である。
- ちらし等を通じて調査の参加者募集をおこなったが、思ったように参加者が集まらなかった。
- トンボの羽化殻調査は、調査人員に比べて調査範囲が広がったため、羽化殻の採集とカウントが大変だった。

忌部わくわくサファリ

島根県／忌部川



川と湖から身近な環境の見方に気づこう



仕掛けた網カゴに何か入っている。
オイカワやスジエビのような。



宍道湖学習。宍道湖と近い塩分はどのコップかな？

■活動の目的

今まで気にもしなかった身近な環境“川”はどんな環境なのか、地域を流れる忌部川での生き物調査や水質調査を体験して、その環境の見方を知る。また、忌部川が流れ着く、汽水湖“宍道湖”に目を向けて、宍道湖の環境やこの限られた環境で共存する生き物のことを知り、生き物と環境との関係について気付く。

■活動の内容

1. 年間3回の河川調査を行い、投網、かご網やタモを用いて生物を採集し、今まで気にもしなかった身近な川に生息する生き物の多さを実感した。
2. 忌部川で調べて分かったことを地域の人たちと情報を共有するため、模造紙4枚にまとめて文化祭に展示した。
3. 今まで活動した忌部川の下流にある汽水湖“宍道湖”の環境について、学習院女子大学環境教育センター品川明教授によるプロジェクトWETや実験を行い、汽水環境について考えた。
4. 今年度の川の活動で体験し気づき学んだことを冊子にまとめて、小学校、公民館や流域の人たちに配布した。



初めて投網を投げる。なかなか良い感じに広がった。



ブルーシートの宍道湖と散らばった色々な餌。どんなくちばしでどんな餌が捕まえやすいかな？



デジタル水温計で、生物の生息要因の水温の測定



文化祭で、活動で分かったことをまとめて地域の子供たちに発表。その後、展示。

■活動の効果

忌部川の上流から下流にどんな生き物が棲んでいるのか、特別採捕許可を受けて実施した投網や籠網の採集から、参加者は身近な川にたくさんの生物が生息することに気が付き、川に関心を持つことができた。河川の環境には上流と下流で水温やCODの相違が大きいことに気づき、その原因が私たちの生活や貯水池などと関係していることに気づきはじめた。下流の宍道湖の環境について、塩分の相違による環境特性を実験や優占的に生息するヤマトシジミに関心を深めた。さらに、ラムサール条約指定の宍道湖でみられる水鳥について、くちばし（食べ物や棲み場）の相違から水鳥が限られた生息場に互いに棲み分けて共存していることを理解した。

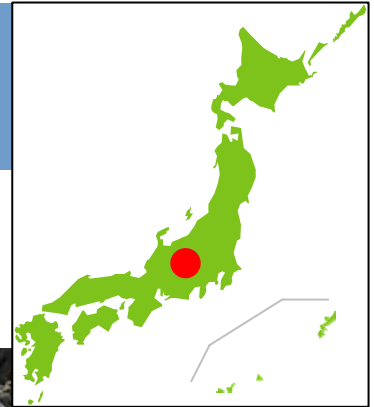
■苦勞した点・反省点

当該河川はブラックバスやブルーギル、ヌートリアの生息する河川であるが、今回の調査では外来種の生息の確認ができなかった。体験学習をメインとした為、天候により活動を中止したが、雨天時でも室内での環境学習を実施し知識を深めたい。



遠山川探検隊「まめなかうりんぼう」

長野県／遠山川



草花、豊か！水、きれい！遠山川大好き！！



保護者の協力を得ながら、沢登りをしました。流れの早いところはロープにつかまって歩きました。およそ300mほど歩きました。



水生生物を採集し、調べました。きれいな水に住むカワゲラが多く見つかりました。

■活動の目的

和田小学校5年生は1年生の時から遠山川に基地を作り、川に親しんできました。今年度は基地の名前をとって「まめなかうりんぼう」という遠山川探検隊を作り、次の目的で活動していくことになりました。

- ・川の観察・調査（草花、水質、水生生物）をすることにより、川の持つ営みや環境について学習し、川へのさらなる親しみや保全対策・環境への意識を高める。
- ・川での体験を（筏下り、沢登り・沢下り等）をすることにより、親しみをさらに深めるとともに自然の恵みに感謝する。

■活動の内容

- ・総合的な学習の時間を中心に、子どもたちが考えた年間活動計画に沿って遠山川を探検し、草花調査、水質調査を行った。草花調査は1カ所の調査のみとなってしまったが、水質調査は3カ所で調査することができ、地図にまとめた。水生生物調査も合わせて行った。
- ・休日を利用して子どもと保護者が中心に遠山川で、河川体験技術員やリバーガイドの方の指導を受けながら、ラフティングボート体験、筏乗り、沢登り・沢下りを行った。事前にライフジャケットやヘルメットの使い方講習会も行った。



COD-DとPHの2種類で水質調査をしました。結果は集計用紙に書き込み、教室でまとめました。



総合の時間に草花調査を行う。たくさんの草花を見つけ、カメラで撮って教室で名前を調べる。



保護者や河川技術者、リバーガイドの方の協力を得て、ラフティングボート下りと筏乗りをしました。子どもたちは初めての体験でわくわくしていました。



男子の数人が筏でやや流れのあるところを挑戦しました。バランスをとることが大変だったようです。

■活動の効果

- ・草花調査や水質調査をすることにより、自然豊かな、そしてきれいな遠山川をずっと守っていこうとする意識が高まってきた。また、これからも調査を継続し、今回できなかった場所の調査もしなくてはと来年度へ意欲も高まっている。
- ・ライフジャケットやヘルメットを着用することで体験活動のはばも広がり、子どもたちは安心して川で遊び、そして今まで以上に川が大好きになった。また保護者も一緒に体験したことで、来年度へ向けさらに充実した活動が計画できそうである。

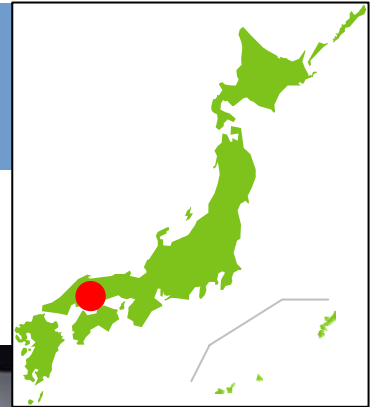
■苦勞した点・反省点

- ・草花調査や水質調査は担任や子どもだけでもできますが、体験活動は安全上、大人の協力がなければできません。実施するまでのその手配や準備が大変でした。
- ・筏を作って川を下ろうと安易に考えていましたが、下見でやってみると下るのは大変危険とわかり、筏乗りに変更。川の専門家に早めに相談することが大切です。



芦田川環境マネジメントセンター

広島県／芦田川



芦田川の自然を伝えるさかなマップづくり



約4時間をかけて“芦田川さかなマップ”が完成



みんなで魚を追い込む



住民に身近な川のイメージを変え、川への親しみを喚起するためのさまざまな活動が、多くの参加者を得て定着するといいですね。(M.M)

■活動の目的

- ・ 芦田川の汚れは、流域からの生活系の排水などが主な原因であり、水環境改善においては、流域住民が芦田川の現状を理解し、よごれた排水を減らしていく等の取組みが必要である。しかしながら、流域住民の芦田川に対する関心は依然として低く、芦田川イコール汚い川といったイメージが強く実践度も低い。
- ・ このため啓発効果の高い流域の子供たちを対象に水辺学習会を開催し、水辺の生き物とのふれあいや水質調査などの体験学習を通じて芦田川への感心や興味を高めるとともに川の自然の大切さを伝えていく。
- ・ また、子供たちで芦田川生き物マップを作成することで、更なる啓発活動への活用を図っていく。

■活動の内容

- ・ 水辺学習会は平成19年10月8日に、芦田川上流の府中大渡橋、支川出口川の2地点において、流域の小学生（保護者含む）とスタッフなど総勢71名により実施した。
- ・ 調査は、生物や水質の専門家等を講師に、水辺の生き物調査（魚とりと同定）、水質調査（透視度計測、パックテスト：COD、リン、チッソ）を実施した。
- ・ “マップづくり”（とりまとめ）は平成20年1月27日に“芦田川見る視る館”（国土交通省）を会場として実施した。各グループのリーダー等の有志が集まり、調査結果を“芦田川さかなマップ”としてとりまとめた。今回は、一昨年（H17年）から3回分の調査結果が比較できるようなマップとした。



支川出口川に入り調査する子どもたち



石に付着している水生生物を調べる



水生生物を同定し記録する



確認した魚の特徴をまとめる子どもたち

■ 活動の効果

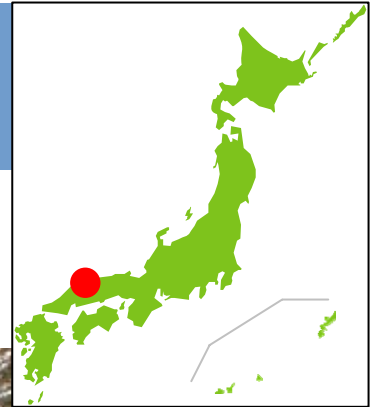
- ・ 新聞等によるPRの効果もあり、参加者数が昨年と比較してほぼ倍増しており、恒例のイベントとして定着しつつあると考えられる。
- ・ 活動後に参加者からは、「魚がいっぱいとれておもしろかったです」「これからも魚調査に参加して川の状態を調べて行きたい」「楽しかったのでまた来年も参加したい」「今いる魚を残しつつ、これからもたくさんの魚が住める芦田川にしていきたい」など様々な意見があり、参加者への一定の啓発効果が得られたと考えられる。

■ 苦労した点・反省点

- ・ 参加希望者が昨年度と比較して2倍程度と増加したため、道具の調達に苦労した。
- ・ マップ作成では、一昨年度からの調査結果があるため、3カ年の比較ができるようにとりまとめた。
- ・ 本年は、昨年と同様に他団体等の様々なイベントが同時期に催されていた上、当団体に同時期に別のイベントを企画していたため、日程が過密になりイベント準備が遅れてしまった。

北陽わんぱくクラブ

島根県／斐伊川・江の川・高津川



川で安全に遊ぶために



大樋水門にてハイドローリック体験



カヌー体験

■活動の目的

子どもたちには、ゲームなどとは比べものにならないほど楽しい自然の川の遊びを体験させ、川での遊びに慣れた子どもたちを育てる。万が一の事故に際しても、流れの中で冷静に判断し自力で安全を確保できるように訓練指導をする。

引率者に対しては、自然の水に関わる安全管理から、救助技術、救命救急法までを体験指導。水に親しむ人口を増やし、水の事故を限りなく減らしていくよう活動していく。

■活動の内容

6月30日、7月1日、(斐伊川)。雨による増水のため、大人のみに変更。引率者のための川の安全講座。講師、レスキュー3ジャパンシニアインストラクター阿部恭浩氏。午前座学。流水の水分学と水力学、救助者の心構え、水難に関わる救急救命法、水難救助技術。午後実技、川の安全な流れ方、流水での泳ぎ方、スローバック、ライフバイトレスキュー、コンタクトレスキュー、集団による流水渡河方法。

8月4(高津川)、17日(斐伊川)。子どものための流水水泳教室。ライフジャケット、ヘルメットを装着し流水水泳体験。シュノーケリング、スローロープによるレスキュー、ハイドローリック体験。

10月8日(江の川)。レスキュー用ラフトボートでの川下り体験。



この日まで水に顔をつけることすら出来なかった小2男児。2時間後にはすっかり霧中です。



座学。水難のための救急救命法。



スロロープによるレスキュー訓練



呼びかけに集まったカヌー愛好者の親子との合同川下り。救助団ライフボートを使い川下りが初めての親子3組6人が体験。

■活動の効果

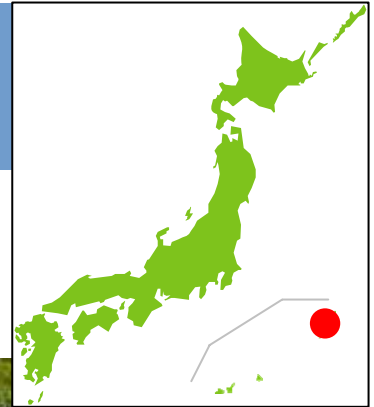
自然の川の何が危険であるかを知り、確実にポイントを押さえることで安全で楽しい体験が実行できることを体験し自然の川に対する認識を高めることが出来た。参加者のほとんどが自然の川の楽しさを実感し、この体験の必要を感じた。流れる自然の川がゲームなどと比べものにならないほど楽しい物である事を体験させた。その中で、自然の川の力の強さも体験し、自分がどうすれば確実に安全に泳ぐことが出来るかを実践させた。一見穏やかに見える流れでも命を落とすことがあることを実感させ、遊ぶ上で確実に守るルールを確認させた。清流の中で沢山の生き物が暮らしているのを自分の目と手で確認し、自然に対する意識を高めることが出来た。

■苦労した点・反省点

天候の悪化による急な増水、気温の低下により、子ども達への活動予定の急な変更をせざるを得なかった。募集告知を掲載予定していた地方紙が大きなニュースの連続に紙面が割けず、募集を掲載してもらえず告知が遅れた。予定の変更、延期により、ラフトボートのレンタル費、輸送費が大幅にかさんだ。大人に対する講習会后、受講者からの口コミでさらに受講希望が相次いであったが、暖かい時季に予備日を組んでなかったため来年に先送りになってしまった。

報得川と美海の会

沖縄県／報得川



日本一汚い川となった報得川を見てみよう



報得川

■活動の目的

報得川は1960年代後半から急速に汚れてきた。平成17年度にはついに日本一汚い川になってしまった。

汚染が改善されない理由のひとつにこれだけ汚れても市民が関心を示さないことがある。きれいな川を取り戻すには、なによりも市民がこの川の実態に触れることが第一歩であると考え、市民による水質調査に取り組むこととした。

■活動の内容

小学生から大人までの幅広い世代で水質調査（パックテスト）を行った。調査では汚染源がどこにあるかを知るために報得川の本川及び各支川の合流ポイントで行い、季節の変化を知るために夏、秋、冬の季節別調査を行った。



夏の水質調査



秋の水質調査



冬の水質調査・与座排水路

■活動の効果

活動がマスコミで報道されることにより報得川への関心が高まりつつある。小中学校では環境学習や総合的学習の時間で取り上げてくれるようになった。しかし、市民に報得川が汚れているという認識は広まってはいるものの地域の積極的参加にはまだまだほど遠く、今後効果的に継続する活動の工夫が必要とされている。

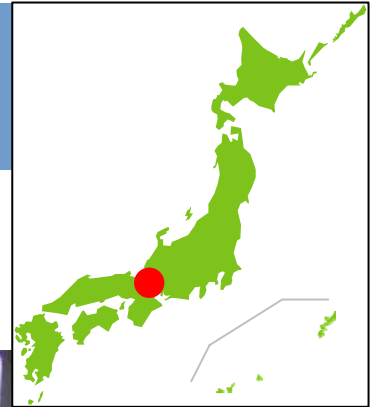
■苦勞した点・反省点

活動への参加の輪が必ずしも広がっているとはいえない状況がある。各種団体や若い世代に対し、参加する事に魅力を感じる工夫が必要とされていることを感じた。



琵琶湖市民大学

滋賀県／余呉湖・琵琶湖



学習会 余呉湖の環境と漁業



ワカサギ産卵・養殖施設の見学。水路に遡上してきたワカサギは、緑色のネットに産卵し、卵は茶色の棕櫚（シュロ）に集められて孵化させるという説明を聞きました。



川並地区農業集落排水処理施設に付属する水質浄化施設の見学。放流された排水は、植生浄化、不織布接触酸化水路、側壁礫間酸化水路を通して余呉湖に流入しています。



周辺集落と水との関わりを知る取り組みを行っており、川（水）と生活の密接な関わりという川に学ぶの原点に通じる活動を行っている。（F.Y）

■活動の目的

日常生活での水との関わりを見直し、実現が難しい河川や湖の水質浄化の可能性を探るために、余呉湖の漁業や水質に関する体験型の学習講座を開催します。余呉湖は1950年代までは伏流水と周囲の小河川が流入するだけの閉鎖湖で、地図上では琵琶湖と隣接しているものの、別の水系として存在していました。1960年代以降、灌漑や洪水対策のために次々と水路が作られ、今では琵琶湖の水がポンプアップされて琵琶湖とつながっている特殊な湖です。琵琶湖よりも早い時期に富栄養化が問題となり、かつては高密度に発生したアオコによって湖全体が覆われ、緑のペンキを流したような状態になったこともありました。

■活動の内容

1. フィールドワーク：余呉湖の特産であるワカサギの産卵・養殖場の見学、生活排水対策として集落で共同管理されている農業集落排水処理施設の見学、琵琶湖の水がポンプアップされている流入路や水位調整をする放水路の見学を行い、余呉湖で行われている漁業と水質との関係、余呉湖と琵琶湖の水質や漁業の違いについて学びました。
2. 講演会：琵琶湖からのポンプアップや、湖中央に設置されている深層ばっき装置の役割とそれらが余呉湖の水質や生態系に実際にもたらしている影響を学習しました。1960年代から現在にかけて、めまぐるしく変化していった余呉湖とその周辺地域について、大いに理解を深めることができました。



余呉湖は集落と田んぼに囲まれた湖で、周囲は約6 kmしかなく、湖岸にたつて一望できました。



琵琶湖湖畔で開催した学習会の様子。琵琶湖の水質や生物についての基礎知識を深める講義を行った。



様々な漁具や漁の現場を見学しながら、余呉湖の漁業について地元の漁師さんに解説していただきました。桟橋に固定された船の生簀にはイワトコナマスが入っていた。

■活動の効果

余呉湖は観光やワカサギ釣場として有名ですが、本来の閉鎖湖であったのが様々な改修を経て琵琶湖とつながるダム湖と化していることはほとんど知られていません。参加者一同そのめまぐるしい変化の歴史に驚き、しかし結果的に琵琶湖の水が入ることで栄養塩類と植物プランクトン量の減少が認められるという現状の解説を聞き、水質改善の難しさを学びました。養殖に重点を置いた漁業の進め方や生活排水対策の共同管理は、水辺に近い集落の水との関わり方を知る非常によい機会となりました。昨年度の「川に学ぶ」活動で協力いただいた琵琶湖の漁業者も交えて活動を実施することができ、琵琶湖・淀川水系流域内での地域間交流が進みました。

■苦労した点・反省点

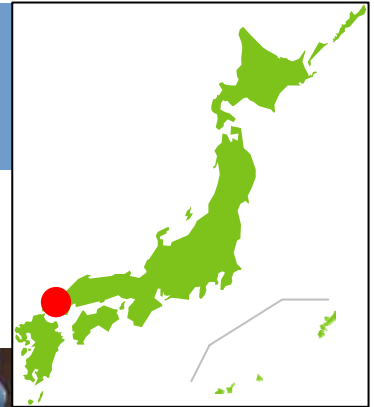
公開講座と体験学習の順序を申請時と入れ替え、漁業のスケジュールや講師の都合等により開催時期も当初と変更になりましたが、内容の充実した活動が実施できたと考えています。

300字で記載しきれないので略しましたが、平成19年9月8日には琵琶湖湖畔でも学習会を開催しました。



水の自遊人しんすいせんたいアカザ隊

山口県／佐波川



ジオラマで再現 川の怖い顔・水防工法



河川氾濫ジオラマ実験：スクリーンに大きく映し出されたジオラマの現場を見ながら、瀧本先生の解説を聞きます。



佐波川中流にある、じゃぶじゃぶ池で危険なところ好きなところの調査です。付箋に書き込んで、地図に貼りました。



最近よく聞く「ゲリラ豪雨」による河川の氾濫が見られるが、是非地域の方々と防災について今一度考えてもらいたい。(T.H)
ジオラマでの実験などビジュアル的にわかりやすく水防の大切さを学べており、今後の広がりが期待できる。(F.Y)

■活動の目的

親水と浸水。水に親しむ一方で、川には怖い顔があることも知りました。川が氾濫したらどうなるの？どこに逃げるの？どうやって身を守るの？ハザードマップをつかったり、ジオラマ実験をしたりして、親子・地域の方々と防災について学びます。

■活動の内容

- 7月24日 防災講義・河川氾濫ジオラマ実験
講師：山口大学工学部准教授 瀧本浩一
防府/防災ネットワーク推進会議山崎隆弘
開催場所：国土交通省山口河川国道事務所
防災対策室
- 8月9日 現地調査
「河川危険箇所確認、自分達がよく遊ぶじゃぶじゃぶ池の危険をさがしてみよう」
開催場所：佐波川河川敷
- 8月15日 まとめ
アドバイザー：山口大学工学部准教授瀧本浩一
開催場所：市民活動支援センター作業室（まとめ）



河川氾濫ジオラマ実験のために紙粘土で人形のお家を各自で作成中です。いろいろな人、家が出来ました。



河川氾濫ジオラマに自分で作った人形を配置します。高くなっている場所がいいのかな？川の近くがいいのかな？何度も移動していました。



川に水がいっぱいです。だんだん溢れてきました。堤防に穴も空きました。「あっボクが倒れちゃう」あわてて避難です。



ルルス防府の市民活動支援センターで、まとめ会をしました。感想を発表したりしました。

■活動の効果

映像や河川氾濫ジオラマでの実験で、川遊びは楽しいけれど、川は時として、怖い顔をもっているということがよくわかったようです。実際には災害を経験したことがない子ども達ばかりなので、イメージトレーニングとしての学習ができました。特に河川氾濫ジオラマの実験では、あふれてくる水に対して、自分達が作った模型の家が流されるのを見て、水はあっという間にやってくることや、低いほうに向かって流れていくことなどよく理解できたようです。また、災害復旧にも関心を持ち、実際に河川での危険箇所確認では、防災ステーションに植えてある木も大切な災害復旧用の資材であることなどを確認することができました。今回の学習で、家の周りの河川にも興味が湧き、雨の日などは水位に気を付けています。

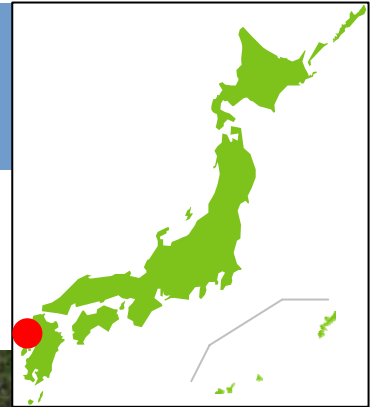
■苦労した点・反省点

参加者の年齢が4歳から中1と幅広かったので、全員に興味を持って望んでもらうにはどのようにしたらよいかということが苦労した点です。

また、参加費を徴収しない会だったので、費用立替など資金面のやりくりが難しかったです。もう少し、地域の方の参加呼びかけをして、いろいろな年代で河川氾濫ジオラマでいろいろ考えてみればよかったと思います。

長崎県立大学経済学部地域政策学科 西村研究室

長崎県／相浦川



相浦川から始まる九十九島の保全



シーカヤックで九十九島のひとつ島の楽島（無人島）に向かう。目的は、ハマサジの生息環境と漂着ゴミ種類のチェックである。



相浦川上流域にある牧場を視察。牧場の環境への配慮（川への気遣い）についてのインタビュー調査を行うとともに、様々な体験学習を経験した。

■活動の目的

1. 身近に存在する稀少植物（ハマサジ：環境省絶滅危惧II類VU）への気づきと、その生育環境の理解と保全の意識をもってもらおう。
2. 川の保全から始まる海・島（九十九島）の保全についての理解を深めるとともに、日常生活での環境に配慮した生活習慣を獲得する。

■活動の内容

2007年7月17日・9月17日 ハマサジ株数調査
2007年9月18日 九十九島のハマサジ生育環境と漂着ゴミの観察
2007年9月21日 上流域の牧場の視察とインタビュー調査
2007年10月19日 水質調査（上流から下流までの5カ所）
2007年11月22日 水質調査（下流域1カ所）
2007年12月20日 水質調査（下流域1カ所）・地域住民へのインタビュー調査
そのほかに、ゼミでの報告を数度行い、意見交換を行っている。



絶滅危惧種のハマサジ。九十九島によく見られるが、河口付近の汽水域でも観察することができた。



クリップボードとカウンター（数取器）を持ちペアになり調査を行う。メジャーを用いて単位面積あたりの株数も確認した。



無人島の漂着ゴミをチェック。川から流れてきたであろうゴミが多く観察された。私たちの日常生活のあり方について考えさせられる場面である



パックテストによる水質調査。今回はCOD、アンモニウム態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素、リン酸態リンの測定を行った。

■活動の効果

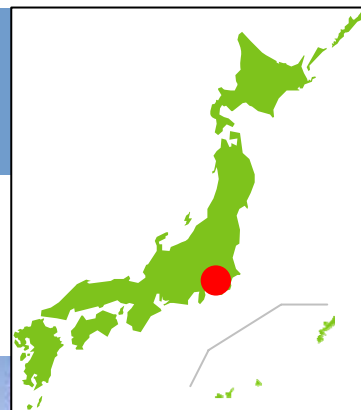
絶滅危惧種であるハマサジの株数調査により、身近な場所に希少生物の存在に気づき、相浦川の自然の豊かさを知るきっかけとなった。また、九十九島および相浦川の環境保全のために、パックテストを用い相浦川の水質調査を実施したところ、上流域ではきれいな水が中流域では家庭排水などの影響により汚れがひどくなっていたが、下流域で浄化されていることが確認された。これは葦などによる自浄作用のためと考えられる。さらに、地域住民へのインタビュー調査により、生活・歴史・景観を知ることができ、以前の姿に少しでも近づきたいという思いが強くなるとともに、水質調査時にある神社の存在を知り、古くから残る神事があることも驚きであった。

■苦労した点・反省点

調査にあたっては天候に左右されることが多く、特に水質調査にあたっては数日間雨の降らなかった日で、かつ干潮の時間に設定することに苦労した。また、近隣住民との検討会の実施が難しく、インタビュー調査という形を選択した。なお、成果報告にあたってはゼミの報告会（公開）や流域で設立が検討されている総合型地域スポーツクラブへのプログラムの提案などを予定している。

NPO法人鶴見川流域ネットワーク

東京都・神奈川県／鶴見川



鶴見川流域ウォーキング月間2007



矢上川源流ツアー



岩川の源流域・谷戸巡り

■活動の目的

流域市民から人気の高いウォーキングを通して、流域市民で流域の魅力を共有し、流域ツーリズムの普及啓発ならびに流域交流をはかります。実施にあたっては河川管理者とも協力し、平成19年度の「ふれあって流域鶴見川2007」参加イベントとして、鶴見川流域水マスタープランの目標の1つである「多様な資源を活かした流域ツーリズムの推進」を支援します。

■活動の内容

4月29日～6月3日の期間中、鶴見川流域で活動するTRネットに参加する市民団体が、それぞれの活動場所周辺で、ウォーキング・イベントを実施しました。市民団体やnpoTRネットのスタッフ、一部では河川管理者も加わって、川や流域、地域の歴史や自然などについての解説をガイドとして行いました。

また、期間の最後にはフォーラムを行い、各団体が実施した流域ウォーキングの成果を発表し合い、ウォーキングを通じた流域交流を行いました。



谷本川自然観察と
恩廻公園調節池巨大地下トンネル見学



源流ウォッチング



フォーラムの様子



チラシ・ポスター

■活動の効果

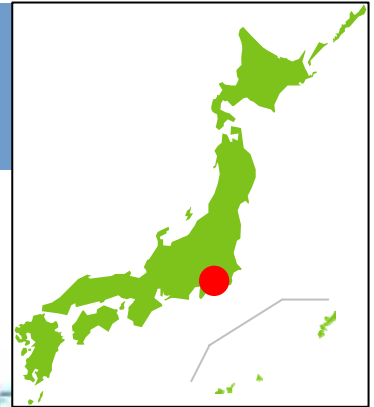
- どのイベントもそれぞれの川・流域の特徴をいかした企画で、好評をいただきました。流域市民に、地域の川への愛着をより持ってもらえたかと考えます。
- さらに、1つのイベントだけでなく、ウォーキング月間のイベントに連続して参加して下さる市民の方が増え、鶴見川流域のファンも育ちつつあることを実感できました。
- 川を楽しむだけでなく、貯留トンネルや堤防の見学を通して、水害から街を守るという治水の取り組みへの理解も深まりました。

■苦勞した点・反省点

支援スタッフの不足



鶴見川下流ネットワーク・鶴見（下流ネット・鶴見） 神奈川県／鶴見川



鶴見川河口干潟で生きもの観察とカヌー体験



講師でお願いした臼井氏による採取した魚等の解説。
地域の人々や子どもたちが熱心に聞いていた。



水辺での生き物観察（魚取り）風景。専門スタッフ
に水辺での子どもたちの活動をサポートしてもらった。

■活動の目的

鶴見区区制80周年に当たる平成19年に、この年6月に完成した鶴見川河口右岸の生麦地区の親水護岸整備及び河口干潟の保全を記念するとともに、この拠点の今後の維持管理の仕組みを考えていくきっかけとして、関係者が交流し広く区民や流域市民が参加する鶴見川の魅力を体験・再発見・共有するイベント「生麦河口干潟観察とカヌー試乗会、河口ウォーク」を開催する。

■活動の内容

- ① 河口干潟の生きもの水族館：魚やカニなどの河口干潟の生きものを採取し「鶴見川水族館」として展示を行った。
- ② カヌー試乗会：流域のカヌークラブ等の協力によりカヌー試乗会を実施した（カヌー7艇使用）。
- ③ 地域協力による鯉のぼりの展示：地域の協力等により鯉のぼり約40匹をイベント会場に展示した。
- ④ 鶴見川に関するパネル展示等：鶴見川流域水マスタープランに関する行政資料や生麦地区の歴史パネル、下流ネット・鶴見の活動紹介パネルの展示を行った。



イベント会場である生麦地先に保全された河口干潟全景。干潟そばの樋管を使って地域より借用した鯉のぼり40匹余りを泳がせた。



カヌー試乗会風景。整理券を配り順番待ちができるほどの時間帯もあった。延べ143名の参加者があった。



下流ネット・鶴見の活動をパネルに作成し展示した。パネルを熱心に見る人々への解説を行った。



台風直後のためか、河口域の魚がたくさん採取できた。イソギンポ、トサカギンポなどの珍しい魚も採取できた。

■活動の効果

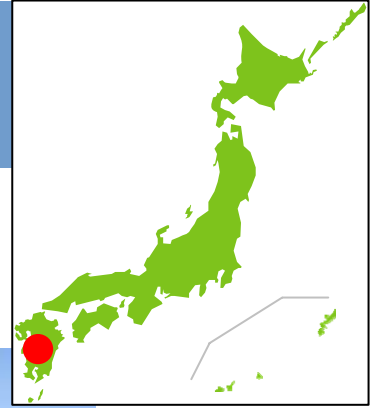
- 事前準備の過程で地区連合会で地域の町会長・部会長さんたちにイベントの企画を説明する機会がもて理解が得られた。当日は地先の町会長に來賓として出席頂きこの干潟の関わりについてお話しいただき、相互理解が深まった。
- カヌー試乗会、生き物観察会ともに地域の親子連れが多く参加され、鶴見川から自分たちのまちをみたり、水辺の生き物に身近にふれることができ、地域の人々、子どもたちにとってふるさとの川としての鶴見川が再認識され、ふるさと意識が高まった。
- 当日の清掃やイベントの準備に地域の方から申し出があり、地域の協力者が発掘できた。

■苦労した点・反省点

- 地域との調整に時間と労力を要したが、地域の町会長にも受け入れられ、結果として地域から多くの方に参加いただけた。
- 貝殻浜は過去に堆積したビン・カン等の破砕物が多く混ざっており、子どもたちに注意を呼びかけ素足、サンダルでの魚取りを原則禁止していたが、数人の擦り傷等の怪我人がでてしまった。幸い大事には至らなかったのが良かった。

NPO法人みずのとらBELL隊

熊本県／加勢川



中学生に地元の川を学んでもらう



最終日の8.5キロの川下りでは、川に落ちているゴミを拾いながら下った。最後は疲れた顔の中にも達成感が溢れていた。



雨天のため、室内プログラムとして、プロジェクトWETの塵も積もればを行い、日頃の生活が自然へ与える負担を学んだ。

■活動の目的

地域の中学生に、地元の川を通して、川の歴史・文化・自然を知り親しみをもってもらい、自然保護や仲間を大切にする気持ちを育ててもらう。

河川観察やカヌーを使った体験学習、川の安全講習を行い、川での安全に対する知識を学び、河川での事故を防ぐ。

■活動の内容

川の安全講義(講義・実技)を行い、川の構造・川の危険・泳法・心構えを学んだ。

河川観察サイクリングを行い、最終日に下る川の形や、そこに咲く植物、歴史・文化を学んだ。

カヤックの実技講習を行い、直進・ラダー・Tレスキューなど技術面を復習とテストを繰り返しながら学んだ。

水上ゴミ拾いを行い、川の現状について学んだ。

最終日にこれまで学んできたことの集大成として、8.5kmのカヤックツーリングを行った。(全13回)



川の安全実習として、ディフェンシブスイムとアグレッシブスイム、スローロープレスキューなどを体験し、カヌーを始める前の心構えを学んだ。



雷注意報が出たため、川の安全知識テストを行った。写真は生徒が回答を説明している様子。



これから活動する川を知るために、最終日に下るコースを自転車で、見て回った。途中、文化や歴史、植生に関する学んだ。



約3.5キロをカヌーで漕ぎ、日本に2つしかない木造の閘門を見学した。写真は、閘門の説明を受けている様子。

■活動の効果

最初に川に対するイメージを聞いたところ、「汚い」「危ない」「入ったことが無いから分からない」といった回答が多かった。しかし、川について学び、川の危険と楽しさを学んでいくうちに、参加者の反応は変わっていき、「川を知ることで、何が危険で何が安全か分った」「地元の川をもっとキレイにしたい」といった声があがるようになった。保護者から話を聞くと、活動を行った日の夜は、日頃しゃべらない子どもが川についてよくしゃべるとのこと。

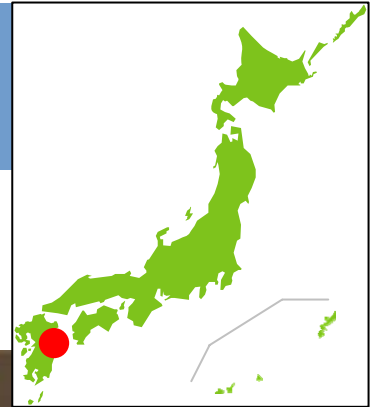
■苦勞した点・反省点

梅雨時期をまたいだ為、雷注意報がでたときなど、晴れているが室内プログラムに変更しなければならないこともあり、判断が難しい時もあった。



NPO法人 水辺に遊ぶ会

大分県／中津干潟・山国川



海洋ゴミに関する問題提起と啓発の行事開催



会場の様子



海洋ゴミ問題を話すコさんとイさん



清掃活動から、海洋ゴミの問題を通じた国際的な連携に発展しており、広がりがみられる。(F.Y)

■活動の目的

当会が7年間年4回継続してきた海岸清掃および漂着ゴミ調査を通じ、増え続ける国内の海洋ゴミがさまざまな社会問題を起こしていることに危機感を感じてきた。国内外の海洋ゴミ問題に取り組んでいるゲストを招き、現状報告と問題提起のフォーラムを実施することで、地域の海辺環境の保全から地球規模での問題解決まで多くの人々に現状を知り、考えてもらう機会を提供する事を目的とした。

12月に大分県内で開催されるアジア・太平洋水サミット公式関連イベントであり、このフォーラムを通じ、海洋環境に対する問題提起を行うという目的も併せ持つ活動である。

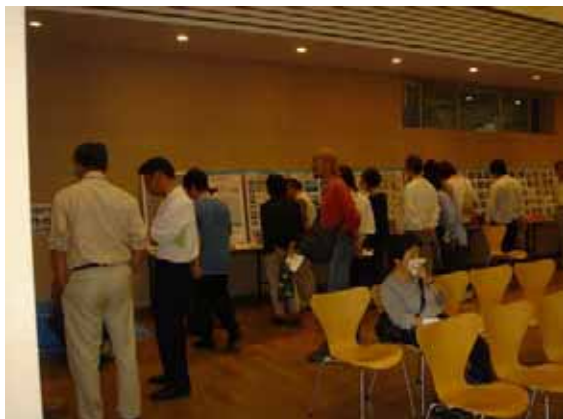
■活動の内容

「海でつながる漂着ゴミと市民運動～拾うだけでええんじゃろか?～」

6月9日(土) 13:30～16:30 中津市立小幡記念図書館ホール

1. 日本と韓国の海洋ゴミの現状報告：小島あずさ(JEAN)・イジョンミョン・コソナ(韓国海洋救助団)
2. 座談会「私たちにできることはなんだろうか」：会場の参加者と共に解決に向けた道を探る
3. 海洋ゴミ問題の解決に向けた「中津宣言」採択

関連行事：大新田ビーチクリーン&漂着物調査&ミニ学習会 6月10日(日) 10:15～12:00 大新田海洋



会場に設けた中津干潟パネルと漂着ゴミコレクション



会場から質問



関連行事：大新田海岸にてミニ学習会



大新田海岸清掃

■活動の効果

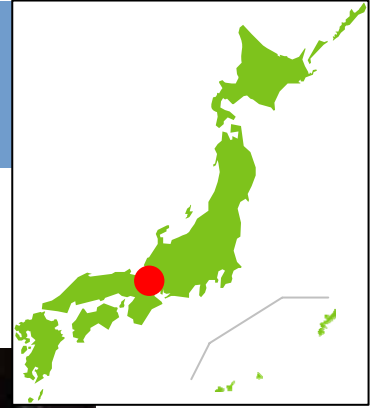
- 海洋ゴミは海という媒体により世界中につながっている問題であること。深刻な問題が世界中で起こっていること。そして、解決のためには、廃棄物を出さない社会の仕組みを考える必要があることや、身近なところから始めることが大切であることなどを、参加者全員で認識する事ができた。
- 日本と韓国、そして多くの国々が国を超えて連携しながら取り組まないといけない問題であり、市民レベルでの活動から国家レベルまで、様々な努力が必要であることが伝わった。
- 中津宣言の採択により、国際社会に向けたアピールを発信する事ができた。
- 海洋ゴミという共通の問題を通じ、環境問題での国際交流のきっかけ作りができた。

■苦勞した点・反省点

- 海外のゲストを招いてのフォーラムは初めての体験であったが、通訳を介しての事前打ち合わせ、スケジュール調整等にとまどうことが多々あり、大変苦勞した。
- 座談会がもう少しはっきりとした方向性を見出せるものになると良かった。
- アジア・太平洋水サミットに向けてより良い形でのアピールの方法を考えることが今後の課題である。

NPO地域生活文化ENN (NPO法人En)

滋賀県／針江大川・カバタ



カバタ100物語



カバタの使い方についてインタビューしている様子



地域の人と一緒に、お昼ご飯を食べている様子

■活動の目的

滋賀県高島市新旭町針江に各家庭にわき出ている水、カバタがある。カバタが針江にいくつあり、針江の住民がどのようにカバタを使用し、水を大切に使っているのか。水と共に暮らしている生活を調査し、その魅力をまとめることにより、針江住民が自分宅以外のカバタを多く認知し、驚き、カバタの価値を再評価することを目指す。また、子ども達にカバタが多くあることも知ってもらいたい（環境教育）。さらに、針江住民以外に、針江の魅力を発信したい。

■活動の内容

4月22日、第1回カバタ調査ではNPO法人En3名、大学生18名、地元住民10名以上、合計約30名が集まり、7班に分けてカバタを調査した。

針江にある120世帯ほどの各家庭にあるカバタを見て回り、所有者にカバタの使い方、思い出などのインタビューを行い、カバタに名前をつけていただいた。名前を考えられないお宅は、学生や地元住民、所有者と一緒に、各カバタの特徴や屋号の名前をつけた。

カバタの調査は、1回だけでは終わらず、4回行われた。途中には針江大川の藻刈りの参加や、地域の文化祭でカバタ100物語の途中経過を発表。この2つの交流だけでも、学生が多く関わった。なぜ、風の者が針江を訪れカバタを見ようとしているのか。中間発表では、大勢の住民の前で、カバタを紹介した。カバタに名前がついていること、カバタの特徴でカバタの名前をつけたことに関心が持たれ、「〇〇のカバタはどこにあるの?」と聞いてくる方が多くいた。



カバタの思い出はありますか？



カバタのある生活を見せていただく



いろいろなカバタがあります



部活のあとの水はとってもおいしい！

■活動の効果

本活動で、毎回針江生水の郷委員会さんにお世話になった。その方たちと一緒にカバタを見て回った。カバタは合計107あり、各家庭に2つもカバタを持っておられるところもあった。生水の郷委員会さんたちは、「こんなにカバタがあるなんて知らなかった」「107もあるとはわからなかった」「こんな使い方をしているなんて」「知らないカバタがたくさんある」などの意見を伺うことができた。

また、中間発表を地域の文化祭で発表し、地域住民の方の前で行った。そうすると「〇〇のカバタはどこにあるの？」と他所のカバタに興味を持たれ、カバタを見てみたい、知りたいという意見を受け取ることができた。また、地域住民の方々は、中間発表に注目してくれ、啓発ができたのではないと思う。

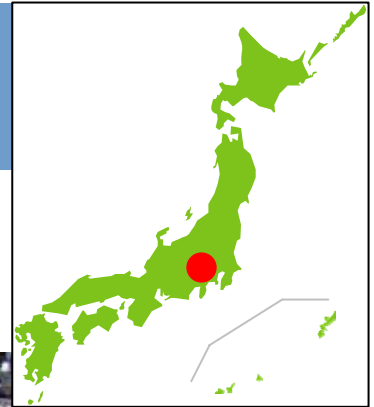
カバタに名前をつけること、名前がつくことは、効果があった。「他のカバタの名前はなに？と気になる。そして、他所のカバタを知ろうとする効果があると実感した。

■苦勞した点・反省点

- カバタに名前をつけることに苦勞した。カバタの特徴やインタビューの中からの言葉を使い、カバタに名前をつけるのだが、なかなかよい名前が浮かんでこない。カバタの所有者、生水の郷委員会メンバーと一緒に悩みながら、名前をつけた。
- 調査表の枠が小さかったため、もっと、大きな枠の調査表にすればよかった。また、調査表についての説明が不十分であったので、使いにくかったようだ。
- カバタ100物語をデータ化（まとめ）するのが一番大変であった。各班ごとに、写真と調査表をまとめてもらったが、名前とカバタ、調査表と写真がずれているということが判明した。何度も学生と地域に確認し、まとめることができた。

森のココペリ

山梨県／鶴川・方屋川・飯尾川



西原の川はどんな川?～調べてみようどんな川～



一つのグループで、調査中にたまたま地域の方が通りかかり、一緒に水生生物を観察した。地元の方も真剣に網に付いた生物を見ている。



とった生物はルーペを使ったり、指標生物の写真を
見て、種類を同定する。同定は意外と難しく、時間
がかかってしまうこともしばしばある。

■活動の目的

1. 上野原市西原を流れる方屋川・鶴川・飯尾川を観察・水質調査をすることにより現状を知る。
2. 地域住民が川について話し合う場、また保全活動を継続的に実施するきっかけを作る。
3. 上記の活動を行うことにより、地域住民の河川環境に対する意識の向上を目指す。また、それにより地域住民の身近なところからの行動の変化を目指す。

■活動の内容

毎月1回、西原を流れる方屋川・鶴川・飯尾川の計10ポイントでパックテストと指標生物による水質調査を行った。パックテストではCOD、pH、硝酸、硝酸性窒素の4項目について調べた。

指標生物は環境省で定められたものを対象とし、自作の網等を用いて行った。



調査前に参加者全員で集まり、調査方法などの簡単な確認を行う。また、調査は3つのグループに分かれ、それぞれ振り分けられた場所で行う。



自作の網で水生生物をとり、水を溜めた容器にピンセットで移す。この網は、親しくしている地元の方が、廃材を使って作っていただきました。



西原（調査地）の川でよく見られるオニヤンマ



パックテストの検査に使う川の水を、スポイトで採取し、専用のケースに入れる。COD、pH、NH₃の検査薬が入った容器でその水を吸い取り、軽く振って混ぜる。

■活動の効果

活動に興味を持って、準備段階では協力してくれたり、広報のときに声をかけてくれる地元の方はいたものの、実際に活動に参加してもらうことはできなかった。なので、当初考えていたような効果は得ることができなかった。

しかし、実際に川の水質を調べる事で、西原の川の水は基本的にきれいだということがわかり、地域の方が昔より川が汚れたと感じるのは、生活排水だけが原因ではないのではないかとということが考えられるようになった。また地元の方達の参加はなかったものの、調査している姿や毎月1回閲覧板でまわした活動報告を目にし、活動への理解を示してくれる人が増えた。このことはこれから先活動していく上で大変重要な効果になったと思われる。

■苦勞した点・反省点

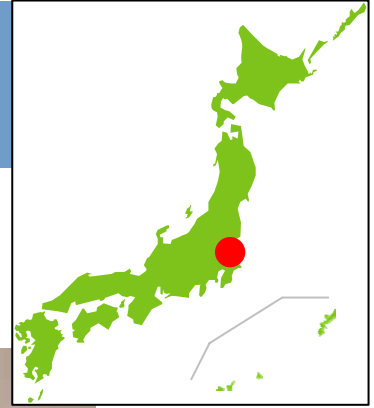
広報の仕方が悪かったのか、活動の日程が合わなかったのか、地元の方の活動への参加が全く得られなかったのもう少し対象者の生活の事なども考えて計画を立てたほうがよかった。

来年度も引き続き実行する予定なので、このことに留意してもう一度計画を立て直してやっていきたい。

また、水質調査は団体内のみで行っていたが、指標生物の判定が困難だったり、調査後の振り返りが不十分だったりという事があったので、その辺に関してもこれから考えていきたい。

NPO法人 アサザ基金

茨城県／霞ヶ浦



カムバックうなぎシンポジウム



ロビーにはパネル展示も行った。主催者のアサザ基金のバックグラウンドを知ってもらえる機会。



シンポジウムに先立ち、流域全体で行ったウナギについてのアンケートの結果を発表した。

■活動の目的

霞ヶ浦の自然再生に対する機運は年々高まってきた。これまで以上に広く様々な主体とネットワークを形成し、自然再生を実現することが望まれる。そのために、流域の市民が当事者としての関わりを強めることが効果的である。人々に親しまれながら世界的に絶滅が危惧されているウナギの保護をテーマとしたシンポジウムを実施する。流域全体で情報や価値観を共有し、より広範な市民が積極的に自然再生事業に参加する大きな流れを作ることにより、自然再生を流域ぐるみで進めるためのネットワーク形成を進めることを目的とする。

■活動の内容

土用の丑の日近くの7月21日に、流域の一般市民を対象に、シンポジウムを開催した。ウナギ研究の第一人者の元東京大学立川賢一氏、霞ヶ浦の魚類生態の専門家の元県内水試場長の濱田篤信氏、水産経済の第一人者アマタ持続可能経済研究所所有路昌彦氏を招聘した。ウナギの生息には水源の里山から川・湖・海までのトータルな環境の連続性が必要なことを、その生態と共に学術的に論じていただいた。また上記招聘研究者と一般参加者を交えてのフリーディスカッションも行い、参加者の間で情報や価値観を共有、自然再生事業への関心を広げる機会とすることができた。シンポのテーマとすべく事前にアンケート調査をおこない、集計結果の報告を行なった。



アサザ基金代表飯島をコーディネータとし、三人の縁者と会場の一般参加者を交えてのフリーディスカッションを行った。盛んに意見が飛び交った。



フリーディスカッションの様子。ディスカッションでは、みな真剣に発言していた。



入場者は約80名。会場が少し大きすぎた。



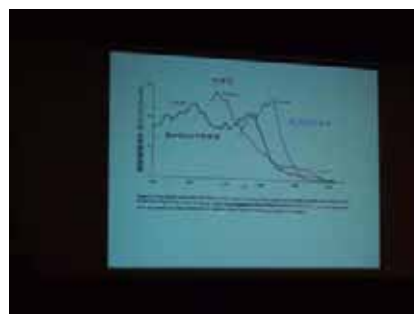
駐車場への誘導。公民館が道路から引っ込んだところがあるので、ポスターを使い、目立つようにした。

■活動の効果

昔のように霞ヶ浦で天然ウナギが獲れるようになるためにはどうすればいいのか、ということが、議論の主たるテーマだった。当初のねらいどおり漁業者からの発言も多く、活発に討論できた。海から湖、川、水源地までの連続性を保っていくためにはどのようにすればよいかということが、参加者のみなさん一人ひとりの胸の中に染み込んだ様子である。来年も是非開催して欲しいという意見が多かった。参加者の河川における環境意識は明らかに高まった様子である。

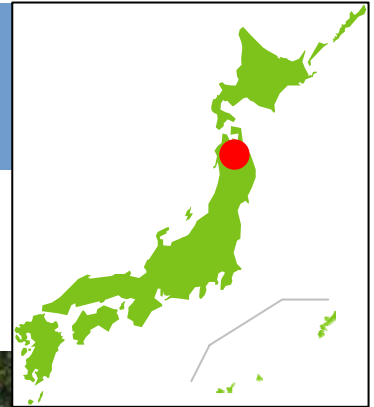
■苦労した点・反省点

多くの参加者は自家用車にて来場した。会場には駐車場が用意してあるが、場所が散在しており、その誘導に苦労した。



青森県立五所川原農林高等学校

青森県／飯詰川



水辺のビオトープ復元・保全活動



繁茂しすぎているカンガレイ、ガマを一部除去する作業を生徒が行った。水深は約30cmであるが、胴長をはいての作業である。除去作業は鎌とクワを用いて実施した。



環境保全型の農林業の担い手育成が急務の今、学校内の農業用貯水池を利用してビオトープ整備とその本格的な活用は、全国の農林高等学校の模範となるものと期待します。(D.Y)



本校の文化祭にビオトープの展示を行った。希少な植物や魚類に来客の方は一様に興味を示していた。本校のビオトープを毎日のように散歩している住民もたくさんおり、地域での知名度はかなり上がってきている。

■活動の目的

全国的に絶滅の危機に直面している希少な動植物を、本校のビオトープを活用して保全することを目的として活動する。本校にはかつて貯水池だったところを埋め立て、放置状態の場所があった。平成18年度に林野庁の補助事業を活用して池を復元したところ、希少な植物や水生生物類が大量に繁殖するようになった。しかし、周辺水域ではブラックバスやウシガエル等の外来生物が地域固有の自然を破壊しつつあるところもみられる。本校の水辺のビオトープを地域本来の自然を残すためのサンクチュアリーにするために、この活動を実施する。

■活動の内容

復元された農業用貯水池を水辺のビオトープとして活用することを考えた。そこで生徒とともに生育する生物を観察したところ、地域ではもとより、全国的にも希少と言われている生物が大量に繁殖していることが判明した。例えば、環境省RDB絶滅危惧Ⅱ類に指定されているマルバオモダカやミスアオイ、準絶滅危惧種ミクリなど多くの希少在来植物のほか、県Aランクの淡水魚ヤリタナゴの生息も確認した。このほか多くのトンボ類などの水生昆虫類、魚類、鳥類も観察されている。しかし、直上の農業用水路には特定外来種のブラックバスやウシガエル、アメリカザリガニなども生息しており、侵入しないようできるだけ駆除するよう心がけた。



ビオトープ直前の集水升でアメリカザリガニの駆除を実施した。水田にはいると漏水の原因にもなるので注意しなければならない。



ビオトープに生息している生物名を調べているところである。助成で購入した図鑑、文献類は本校の図書館で管理することにした。多くの生徒に活用してもらいたい。



ビオトープ内にはたくさんの植物が繁殖している。特にミズアオイがたくさん生息しており、絶滅危惧種Ⅱ類に指定されている希少種でもある。その他、絶滅危惧種Ⅱ類のマルバオモダカも生息している。



ビオトープに入ってくる水路上流の生物調査を実施した。アメリカザリガニが第繁殖しており、タナゴ類の産卵に活用されるドブガイも生息していた。ドブガイは前年、ビオトープに放流した。

■活動の効果

豊かなビオトープにするために、できるだけ多様な生物が生息できる環境にすることを心がけ、生徒とともに管理を実施した。増えすぎたカンガレイやガマなどを除去し、外来種については、直前の水路まできているブラックバスを約20匹駆除した。常日頃、生徒たちが管理することにより、毎日の生物の変化をよく観察でき、草刈りやゴミ拾いなども実施し、ビオトープは快適に観察や散歩ができるようになっている。そのため地域のたくさんの方々が毎日のように本校を訪れてきている。また、地域教職員や森林インストラクター会研修、小学生の総合的学習での観察会などにも何度も活用されている。全国学校ビオトープコンクールで銀賞を受賞した。

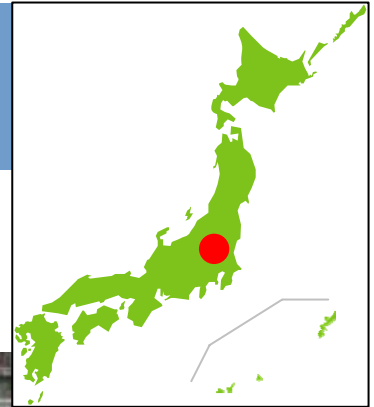
■苦勞した点・反省点

外来種進入阻止のための監視に非常に神経を使った。また、藪状態にならないためにビオトープ内の草刈り管理を行ったが、非常に多大な労力が必要で、一部しかできなかった。定期的にガマやカンガレイの大規模な抜き取り管理が必要と考える。



余笹川流域連携ネットワーク

栃木県／余笹川・黒川・三蔵川



小学生の鮎の友釣り体験と川遊び体験



【鮎の友釣り体験】昨年より参加者が多く、大人一人につき子供2人を指導。竿をおそろおそろ持ちながら、掛かると大きな歓声を上げていた。



【マスのつかみ取り】マス700匹、ウナギ10匹、鮎30匹を4回に分けて放流。子どもたちは歓声を上げながら魚を追いかけた。

■活動の目的

平成10年8月末の未曾有の豪雨で被災した余笹川等は、4年という短期間に復旧工事を経て河川環境が一変した。このため、各河川の代表箇所における瀬・淵等の物理的变化、植生の回復状況、魚類の種別と個体数等生態系の経年変化を定期的、継続的に調査し整備効果を検証する。

また、地域の子ども達や住民を対象にした「川の日記念事業」や「よささウォーク」「河川清掃」を行い、河川に対する理解と愛着心を育むことを目的とする。

■活動の内容

- 7月7日（土）：川の日記念事業としてマス、ウナギのつかみ取り、地元「郷土の河川の環境と生態系を愛する会」と連携し、地元小学生を対象とした鮎の友釣り体験、投網の実演、川で遊ぶ人達が安全にかつ楽しく川と親しむためにライフジャケットを身につけて水中歩行訓練や落差工での流速体感を行った。（参加者：約300名）
- 8月25日（土）：河川環境調査として、これまで4年間継続している余笹川等3河川の横断的变化、植生回復状況、魚類の棲息状況を行った。（参加者約50名）
- 9月30日（日）：「よささウォーク2008」として5km、10km、20kmの川沿いのコースを設定し、余笹川の自然豊かな環境を実感しながら堤防を歩くイベントを実施した。併せて会員による清掃活動を実施した。（参加者：約500名）



今年から会員と一般参加者を対象に川ガキ教室を開催。救急水難救助国家資格を持つ専門家2人からリバーレスキューや救助ロープの投げ方などを学んだ。



浮子を使用して、流速を測定し概略の流量を算出。普段歩かない川底をよろけながら歩く。



会場にある池を利用して、カヌーの教室を開催。初めての経験で緊張気味。



【よささウォーク2007】5km、10km、20kmコースを歩くウォーカー。常連も多くなり、余笹川の豊かな自然を満喫しながら思い思いの足取りで完歩する。

■活動の効果

1. マス等のつかみ取りに参加した幼稚園児達は、余笹川の豊かな水と河川公園の緑のオープンスペースの中で、半日ではあるが川と魚にふれあい、自然体験を満喫した。
2. 鮎の友釣りに参加した小学生は鮎の習性を会員から説明を受けると共に、釣りの楽しさを体験した。また、日頃見たことの無い投網という伝統漁法も学んだ。
3. 環境調査に参加した会員は、年ごとに大きくなる河道内樹木、植生の回復力を学んだ。また、各種活動が地域住民と一体となって行っているため、良好な河川環境の保全に対する住民の意識が着実に定着しつつある。

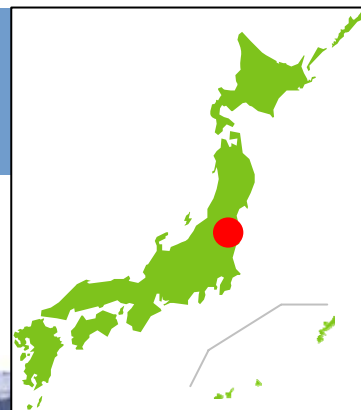
■苦勞した点・反省点

ライフジャケットを使用した川ガキ教室を今年初めて行ったが、参加者が少なく学校との連携が必要である。（事前の計画的な広報活動を行う必要がある）



NPO法人会津の文化づくり

福島県／湯川支流



川を活かした黒川城下の街づくり



太田第2水門近くの交差点。現在は鉄製の構造物。戸ノ口堰用水が流れ、その下を分川が流れている。昔からのようだ。



黒川城下の町づくり。旧河川の検証発表、志南公民館にて。マップを中心に検証の経過・事実・課題を発表。公民館・書籍等で無料配布する。

■活動の目的

芦名時代の黒川の城下を流れていた旧車川・分川の実態をフィールド調査し、現状との関わり方や街づくりの基本となる旧河川の川筋・要注意箇所などを白図におとしこみ、川マップを作成・印刷して、発表する。

■活動の内容

市街のフィールド調査を市民に呼びかけ、参加者とともに会津若松市内を流れている旧車川・分川の流路を調査し、要注意箇所を確認、意見をまとめて、マップ・資料づくりをした。さらに、公共施設・書店などを通じて配布した。



雁堰から導水された旧車川筋調査。元精米所で水車を使って米を精米していた話を聞く。



川筋に住居がたちならび、入っていけないところもけっこう多い。



病院前の鉄ブタの下を旧車川が流れる。一部道路側の流れに合流させられている。



分川の平安閣の東側にかかる小橋で八角にぬけるうら道である。「あぶない」の表示があるが、小川のふぜいがある所である。

■活動の効果

調査したこの2筋の川が、城下づくりにとても大切であることが実感された。また、川筋の勾配図を見ると日頃実感していない高低差があることに多くの人が驚いた。

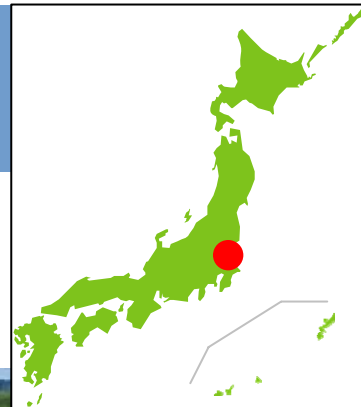
■苦勞した点・反省点

調査する川筋が現地を歩いてもなかなかわかりづらく、道路の下に隠れているところが多かった。川筋と他の文化財とのかかわり、お日市の分布も今後記入したい。また、この川筋に関連する川についてもさらに調査して加えたい。



茨城県稲敷郡美浦村立美浦中学校科学部

茨城県／霞ヶ浦流入河川他



水質の変化する要因を探る



プランクトン調査の様子。ごみが多くてプランクトンは思ったほど観察できませんでした。きっと、ごみが多すぎるためプランクトンが繁殖できないのかもしれません。



昨年8月にエビの大量死があった大須賀津川上流の調査場所。ここは他と比べて金属濃度と電導率が低くなっていましたが、塩分濃度は高くなっていました。この原因の追究では、予備実験を色々を行い、納得のいく結果を出すことができました。

■活動の目的

霞ヶ浦の浮遊物中の金属が流入河川から流れてくると考え2河川の上流から河口までの水質調査を行ってきた。偶然エビの大量死を発見し、その原因を探ろうと考えた。理由は、エビ大量死は水質が大きく変化したことによるもので、原因追及が水質の変化する要因の一つを探ることにつながると思ったからである。そこで、活動目標を次のように設定した。

1. 霞ヶ浦の浮遊物中の金属は流入河川から流れてくるかどうか調べる。
2. エビ大量死の原因を調べる。
3. 水田・蓮田の水質を、浮遊物を中心に調べる。
4. 生徒や地域の人たちの霞ヶ浦に対する興味関心や科学部に対する評価について調べる。さらに、上記目標を達成する活動を通して、生徒の科学的資質の向上もねらっている。

■活動の内容

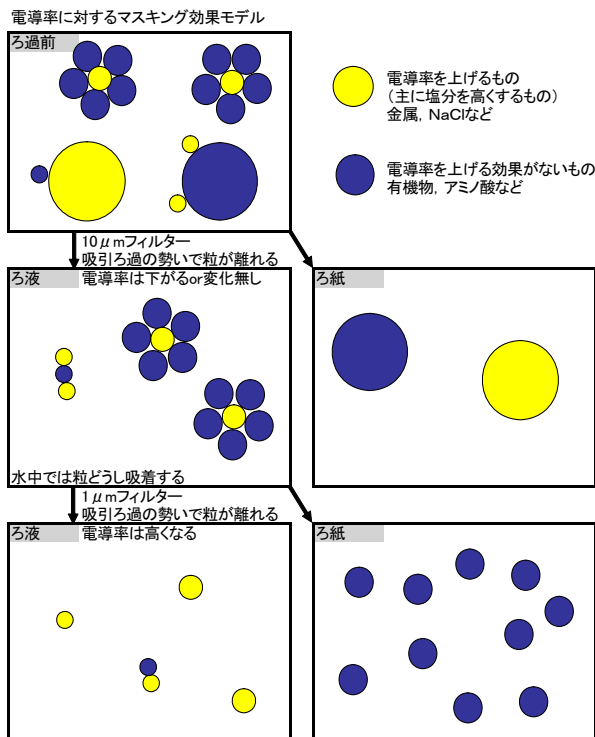
1. 霞ヶ浦流入の2河川の上流、中流、河口の3地点、計6地点を定期的に水質調査、浮遊物の調査を行った。
2. 流入河川周辺計14地点の土中に含まれる金属の調査を行い、金属が途中から沁みだしているかどうか調べた。
3. エビ大量死の原因の追及を、塩分濃度、電導率調査中心に調べた。
4. 水田や蓮田の水質調査や金属調査を行い、霞ヶ浦への影響を調べた。
5. 電導率を変化させるメカニズムについて触れる深い研究に発展した。
6. 研究発表会に参加したり、茨城県体験学習発表会コンクールで研究発表を行う予定である。
7. 霞ヶ浦や科学部に対する評価を生徒や地域の人にアンケート方式で調査した。



霞ヶ浦の調査をしているときに見つけたカワヒバリガイ。岸壁の波打ち際にたくさんついていました。



雨の日でもがんばって調査に出かけました。新入部員が入って活発になった科学部は、これからもまともに元気に活動をしていきます。



マスキング効果については粒子モデルで大変分かりやすく説明でき、納得のいく結論にたどりつくことができたので満足しました。自然の仕組みとは本当に不思議なものです。

■活動の効果

【活動した生徒の変容】2007年3月には茨城コープ活動交流会での生徒による発表を行い、霞ヶ浦の白濁についてわかりやすく発表した。たいへん興味深い内容であったことから、参加者や主催者にとって好評であった。また、偶然臨席していた新聞社から取材を受け、生徒が「霞ヶ浦に興味を持ってほしい、きれいになってほしい。」と自信を持ってインタビューに答えていた。また、8月には「世界子ども水フォーラムフォローアップin福岡」に茨城で唯一参加できるなど、活動の成果が認められてきた。参加した生徒は、全国の生徒と水問題について議論して研修を深めてきた。今後も2年生以下活動を引き継ぎ、霞ヶ浦についての研究を行うことになった。

活動内容においても、エビ大量死の原因を調査することで学習が深まり、河川の電導率や金属濃度の測定値が実は隠された値で、本来はもっと高い値になるという疑問を持ち、仮説を立てて検証した。そして、そのメカニズムも図

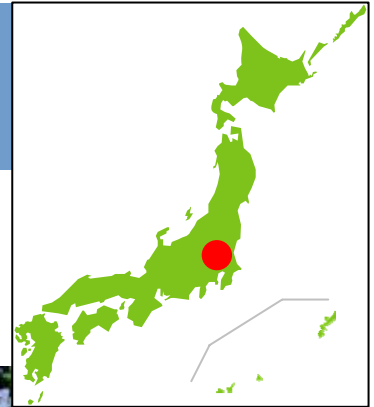
でわかりやすく説明できるなど科学的資質が高まった。

■苦労した点・反省点

1. 濃度変化の計測では、授業の合間や休日に測定するなど、連続できるように工夫した。
2. エビ大量死の原因追及に当たっては、予備実験をしっかりと行い多角的に実験を行った。
3. 調査をするにつれて膨大なデータをどうまとめるか、どのように分析するか苦労した。
4. 参加者の人数が増え、車の手配が不可能になったため、調査に行く際は自転車で行った。
5. メンブレンフィルターとパックテストをたくさん使ったため、予算の確保に苦労した。
6. 浮遊物や浮遊物中のプランクトン調査は根気が必要で、購入したカメラは役立った。
7. エビ大量死がなかったら流入河川の電導率や金属値が隠されていることに気づけなかった。
8. 霞ヶ浦や生徒へのアンケートは聞き取り調査やアンケート集計を行い、集計に苦労した。

群馬県邑楽郡邑楽町立中野東小学校

群馬県・栃木県／渡良瀬川



心に響く「自然体験学習」



6年サイクリング：葉鹿橋～渡良瀬大橋。途中、雲龍寺で足尾鉍毒事件の話講師の広瀬先生から聴く。自然・緑の大切さを学ぶ。



4年生初めての川デビュー。先生の指導を受けておっかなびっくり流されます。きれいな川でよかった！

■活動の目的

校内研修の主題「互いを認め合い、自らを高めようとする心豊かな児童の育成」、副主題「心に響く自然体験学習の伝え合いを通して」を実践するために、「川学習」を中心とした活動を行っている。

4年は「川は身近な宝物～渡良瀬川中流の川や林を体験しよう」、5年は「自然は楽校～川と林を探ろう」、6年は「自然と人間～川と人とのかわり」をそれぞれテーマとして、多くの価値ある自然体験活動をさせることにより、目指す児童像に迫る。

■活動の内容

4年では、渡良瀬川の中流を中心として、各季節の渡良瀬川を観察し多くの自然体験活動を行った。5年では、上流・中流・下流での活動を通して川の変化を多面的にとらえ、川や自然に対する知識・理解を深めていった。6年では、足尾鉍毒事件を中心として歴史的な学習と関連づけ、また、渡良瀬遊水地では、葦原浄化システム等で人々の努力と工夫を知り、揚げ舟と水塚の見学では先人の知恵を知り、河川敷サイクリングでは土地の利用にも目を向け、人と川との関わりの観点からも学習した。



国交省の方の指導を受け、この後水質検査に臨んだ子どもたち。鉱毒事件と絡ませて、水質の維持・管理の大切さを学びました。



講師の先生から魚の捕り方を教わる子どもたち。動物・自然・緑の大切さを学ぶ。



国交省の方の指導を受け、「やまめ」「いわな」を放流する5年生の子どもたち。自然の連鎖を学習しました。



前日の雨で増水した川は水量たっぷり、流れも急。でもベテランの6年生は余裕たっぷり。天候と水量の関係をしっかり体験した子どもたちです。

■活動の効果

児童は多くの自然体験活動を行うことから、自然に対する知識と理解を深め、自然を大切にしようとする心が育成された。また、活動の中から友達と協力し、互いを認め合うことの大切さを学ぶことができた。

保護者や地域の方は、毎回多くの方が積極的に支援活動を行ってくれた。その中から学校の活動に対する理解が深まり、自然体験活動に対する協力態勢が整ってきている。さらに保護者同士の連携も強くなった。

■苦勞した点・反省点

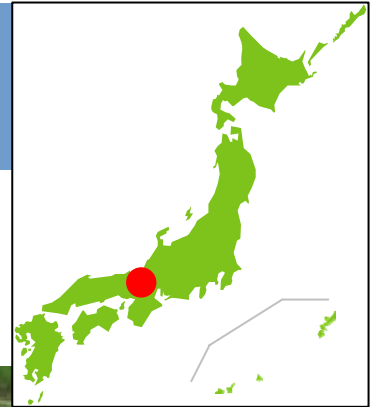
渡良瀬川での自然体験活動は、天候に左右されるため、悪天候等の場合の代替えプログラムの設定が難しい場合がある。

本校は、自然体験学習が校内研修の中心になっているため、他教科の学習との関連性をより明確にしていく必要がある。



宮津美しさ探検隊

京都府／大手川



小学生120人による生物・水質調査と展示



手作りの実験装置で海水と淡水が接する河口付近の水の状態を勉強



タモで魚をとる子どもたち

■活動の目的

宮津市街地を流れる大手川は2004年の台風で氾濫し、2400戸を超える家屋が浸水。河川激甚災害に指定され、現在水生生物や親水性にも配慮した河川改修が進められていることから、この機会に川づくりへの市民参加の一環として、生命の宿りである川の役割を広く子どもたちや市民に知ってもらおう取り組みを企画した。

■活動の内容

宮津美しさ探検隊、上宮津21夢会議の2住民グループと京都府丹後土木事務所、宮津市教育委員会の4者で“水辺の学校「大手川自然博物館」”実行委員会を立ち上げ、宮津小学校と上宮津小学校4年生116人の総合学習として、大手川の上・中・下流の4か所で水質調査および魚介類、底生生物の採取・調査を実施。採取した生物を改修工事の資料などと共に市内ショッピングセンターの催事場で5日間展示。751人の入場があった。



メモをとりながら講師の話熱心に聞く子供達



アルコールで固定した底生生物をファープルで観察する子供



水槽に入れた魚などの説明を聞く子供達



パケットテストでCODを調べる

■活動の効果

川に入り、生き物とふれあうことで、子供たちは驚くほど元気になる。大人も童心に帰って魚とりを楽しんでいた。

子供たちと展示入場者にはアンケートをお願いしたが、アユをはじめとして多くの魚が大手川に住んでいることへの驚きの声が目立った。また、底生生物やパケットテストによる水質調査も子供たちには興味深かったようだ。

展示入場者も予想以上で生き物を介することで日頃関心の薄い大手川に目を向けてもらえた点が、今後の取り組みの展望を含め、大きな成果であった。また、京都府の海洋センター、水産事務所保健所や魚っ知館（水族館）などとの大手川をめぐるネットワークができたのも大きな成果である。

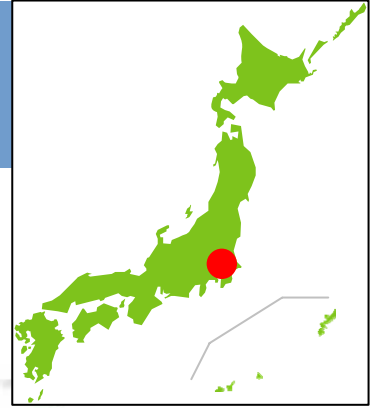
■苦勞した点・反省点

この種の催しで一番の悩みの種は天候。今回は梅雨明けの遅れや季節はずれの台風の接近と重なり、実施が危ぶまれたが、調査場所や内容などを一部変更して、何とか実施できた。小学校の授業、助成金交付との絡みもあり、この種の活動の難しさを感じさせられた。

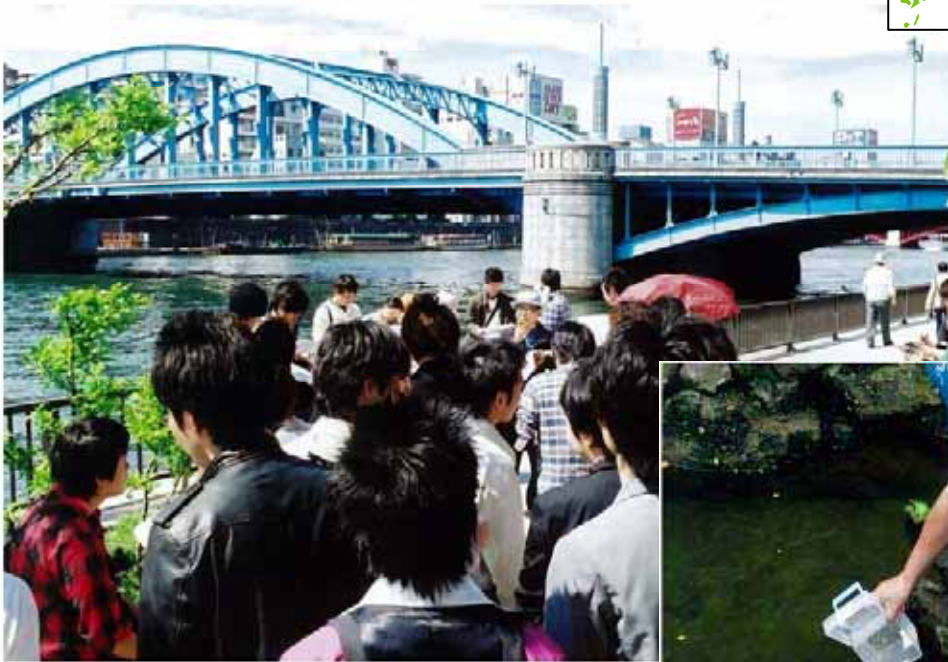
また、採取生物の展示が思いのほか大変だった。種類によっては途中死んでしまう個体も多かったが専門家のアドバイスなどもあり、何とか5日間の展示ができた。魚介類飼育のノウハウを日頃から身につけておく必要性を感じた。

隅田川市民交流実行委員会

東京都／隅田川



隅田川のテラス堤防を活力と触れ合いの源に



隅田川大学FW堤防と護岸：駒形橋での解説風景
(講師：島正之氏)



メダカの放流

■活動の目的

隅田川沿川を「隅田川大学公開講座」として、歴史文化の探究や水生物観察（リバーウォッチ）および沿川のワンド・テラス池等に植物栽培・メダカ放流（フィールドワーク）を実施し、環境保全・育成の啓発・啓蒙を図る。

■活動の内容

- 沿川の堤防・護岸・橋梁・水生物等のフィールドワーク
- スーパー堤防等のワンド・テラス池への植栽・放流
- 地域住民・生活者への自然体験機会の創出
- 隅田川流域（浅草～汐入）の水辺環境保全・育成の探究等



吾妻橋テラス池：ピオトープ形成型のテラス池研究
(講師：吉岡博明氏)



スーパー堤防上の勝海舟銅像の前で参加者の集合写真



植栽・放流スタッフ



植栽2日後のスイレン状況
(平成19年9月18日)

■活動の効果

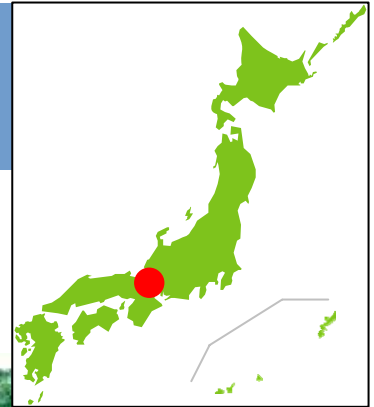
- 沿川リバーウォッチングやフィールドワーク等を通じて地域住民・生活者への自然環境の重要性認識が高められた。
- 地域住民・生活者、河川愛好者等が河川環境保全育成に向けて協働推進できる機会創出方策が得られた。
- 市民と行政が協働促進する方策のアイデアが得られた。

■苦勞した点・反省点

- 天候異変による対応が充分でなく、一部変更になった。(不測事態への対応計画の必要性を感じた)
- 植栽や放流時の諸荷物の運搬に工夫の必要性を感じた。
- 地域住民や学生への広報・アピール方策を工夫する必要を感じた。

伯母Q五郎～伯母川研究子どもエコクラブ～

滋賀県／秋ノ川・伯母川他



ふるさとの自然のすばらしさを見つけよう



美濃郷川で魚調査を行いました。小さな魚がたくさんいて数百匹のカワムツをとりました。自然ゆたかな川であることを発見しました。



講師安岡直樹さんの指導のもと子どもたちは前川の水質調査を行いました。



子どもたちが主役になった活動展開は、その成果も大きいかわりに、支える大人たちの労力は、大変なものがあると思います。市内全域に広がる活動は、子どもたちの中から、川づくりの本物のリーダーが生まれることが、大いに期待されます。(D.Y)

■活動の目的

草津市内の9河川で、子どもたちによる魚とりイベントを開催しました。その目的は、エコクラブの子どもたちを地域の環境活動の担い手に育成することです。それぞれの川で魚とりのイベントを企画し、運営することを通して、体験の場や様々な人との交流の場を提供し、環境活動リーダーとしての資質を養います。また、参加した子どもたちは、身近な川の自然のすばらしさを発見し、地域に愛着を持つことができます。子どもたちは三年かけて草津市内の20河川で魚調査を行ってきました。草津市内にどんな魚がいたかをマップにまとめ紹介します。

■活動の内容

このプロジェクトは、伯母Q五郎が「くさつお魚マッププロジェクト」として3年前より実施してきました。草津市内の20河川で子どもたちによる魚調査を行い、その結果をマップにして発表するというものです。マップ魚だけではなく、川の様子やパックテストで調べた水質のデータも紹介します。エコクラブの子どもたちが草津市内の川やいきものに興味を持つ子どもたちを誘って調査をします。調査では、伯母Q五郎の子どもたちに魚とりの仕方や分類の仕方を説明します。いろいろな地域の子どもたちとの交流も目的の一つです。秋ノ川・伯母川・駒井川・横津川・前川・養老川・殿田川・菖蒲谷川・美濃郷川で調査しました。



伯母川で魚調査を行いました。地域の子もたちが約40名参加し、たまあみをつかってたくさんのカワムツをつかまえました。



養老川で魚調査を行いました。ギンブナがとれました。ブラックバスは見えていたけれど、とれませんでした。



透視度測定器で9河川すべての透視度を調べました。



ポスターやチラシを作って参加者を募りました。

■活動の効果

それぞれの川の流域に住む子どもたちにポスターやチラシを配って参加協力を呼びかけました。川によっては、たくさんの子もたちの参加があり、魚とりを通して、自然のすばらしさや楽しさを伝えることができました。また、エコクラブの子もたちと地域の子もたちとの交流も生まれました。エコクラブの子もたちにとっては、イベントを実施するにあたって川の下見や事前の水質調査、当日の司会運営を通して、地域のリーダーとしての資質や友達と協力し合うことの大切さを学びました。20河川の調査結果を滋賀県や草津市のイベントで発表することを通して、身近な自然の大切さについて考える機会となりました。

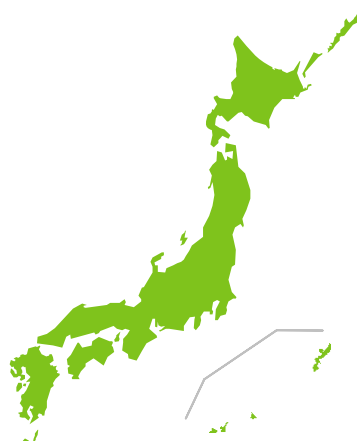
■苦労した点・反省点

- ① 安全確保：市内の全ての川で魚調査をしましたが、深い川や流れが急なところがあり、安全に入れる場所を探すのが大変でした。
- ② 参加者の募集：公民館にポスターを貼るだけでは、認知度が低く参加者がほとんどありませんでした。学校にお願いしてチラシを配ってもらえたところは、多くの参加者がありました。どのようにして子どもたちの参加を増やすかは課題です。

平成19年度 川に学ぶ活動助成団体 都道府県順一覧表



頁	団体名	都道府県	河川等
57	青森県立五所川原農林高等学校	青森県	飯詰川
61	NPO法人会津の文化づくり	福島県	湯川支流
55	NPO法人アサザ基金	茨城県	霞ヶ浦
63	茨城県稲敷郡美浦村立美浦中学校科学部	茨城県	霞ヶ浦流入河川他
59	余笹川流域連携ネットワーク	栃木県	余笹川・黒川・三蔵川
65	群馬県邑楽郡邑楽町立中野東小学校	群馬県・栃木県	渡良瀬川
25	川原で遊ぼう会	東京都	平井川
69	隅田川市民交流実行委員会	東京都	隅田川
43	NPO法人鶴見川流域ネットワーク	東京都・神奈川県	鶴見川
19	ずし環境会議・まちなみと緑の創造部会	神奈川県	田越川
45	鶴見川下流ネットワーク・鶴見(下流ネット・鶴見)	神奈川県	鶴見川
53	森のココペリ	山梨県	鶴川・方屋川・飯尾川
29	遠山川探検隊「まめなかうりんぼう」	長野県	遠山川
5	NPO法人長良川環境レンジャー協会	岐阜県	長良川
15	鈴鹿高等学校自然科学部	三重県	鈴鹿川
23	NPO法人瀬田川リハブレ隊	滋賀県	瀬田川・琵琶湖畔
37	琵琶湖市民大学	滋賀県	余呉湖・琵琶湖
51	NPO地域生活文化ENN(NPO法人En)	滋賀県	針江大川・カバタ
71	伯母Q5郎～伯母川研究こどもエコクラブ～	滋賀県	秋ノ川・伯母川他
67	宮津美しさ探検隊	京都府	大手川
3	明石高専河川環境研究室	兵庫県	喜瀬川・鹿島川
11	丹波市立西小学校	兵庫県	葛野川
9	すいすい倶楽部	広島県	沼田川
31	芦田川環境マネジメントセンター	広島県	芦田川
1	都賀行公民館子どもクラブ	島根県	猪谷川
27	忌部わくわくサファリ	島根県	忌部川
33	北陽わんぱくクラブ	島根県	斐伊川・江の川・高津川
39	水の自遊人しんすいせんたいアカザ隊	山口県	佐波川
7	千代田のアサザ保存会	佐賀県	中地江川
21	自然と暮らしを考える研究会	佐賀県	厳木川
41	長崎県立大学経済学部地域政策学科西村研究室	長崎県	相浦川
49	NPO法人水辺に遊ぶ会	大分県	中津干潟・山国川
47	NPO法人みずのとらBELL隊	熊本県	加勢川
13	NPO法人五ヶ瀬自然学校	宮崎県	五ヶ瀬川
17	薩摩川内市立入来中学校	鹿児島県	樋脇川
35	報得川と美海の会	沖縄県	報得川



水辺のある暮らし ～平成19年度「川に学ぶ」活動事例集～

平成21年1月 発行

編集発行

財団法人リバーフロント整備センター

〒102-0082 東京都千代田区一番町8番地 一番町FSビル

TEL:03-3265-7121,FAX:03-3265-7456

「川に学ぶ」活動助成事業事務局 担当:研究第一部 児玉、永井、沼田

その想い、忘れないでと応援します。

ただ、ただ純粋に
なにかを追い求める心。
大きな夢を抱いて、その夢を自ら
つかもうとする気持ち。
宝くじは、可能性いっぱいのあなたに
ずっとそばで応えられる
存在でありたいと思っています。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。



財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.jla-takarakuji.or.jp>